橘大隊は第一、第三中隊を第一線其他を第二線として、午前四時土臺子東北約二千米突の散兵壕より出發して、各中隊は併立縱隊を以て隊形としたが、折から雨後の月光は雲をもれて皎々と照りわたり、土地は泥濘なる上に折り倒したる高粱は非常に其運動を困難ならしめたが。それでも極めて靜肅を守りて前進して敵前二百米突にある鐵條網の間隙を通つて、正に高地の斜面に達せんとするまでは敵の射擊を受けなんだが。愈々これから高地へ攀登しかけ樣とする時に夜もまた將に明けんとしたので、敵は初めて我が前進を發見して猛烈極まる射擊を始めたのであつた。此時遙かに東方右翼隊の方面でも射擊の音が非常に熾んであつたが、勇敢剛毅なる周太橘少佐は少しも敵の射擊に驚かずして、先づ其隊を其高地の脚に停止せしめた。

此の敵前咫尺の高地脚で其隊を止めて、よく地形と敵の模樣とを沈著して偵察して居たが、何か得る所があつたらしく第一線たる第一、第三兩中隊の中央へ、豫備の第三中隊を增加して其殘りの第四中隊を、第一線の右翼後近く

備へて正に突擊の命令を下さんとしたが。此時又々敵の射擊が一層猛烈となつたので、まだ突擊の命令を下さぬ中に第一線たる第一、第三中隊は敵に向つて前進し、其增加を命ぜられたる第二中隊はそれに伴なつて突擊したので。死傷は非常に多かつたが第三中隊が最先頭となつて、標高一四八高地の前方の敵壘へ突入した。然るに突擊の命令なく不統一に突擊したのであるから、忽ち敵の逆襲に出會して第三中隊長安藤信大尉は戰死する、それこれする間に此の中隊は山の中腹まで擊退せられて仕舞たのであつた。それに續いて突擊したる第一、第二中隊も亦敵の十字火を被むつて、第一線たる三中隊は山腹に固著して現狀を維持するといふ苦境に陷つた。其後から橘少佐は第四中隊を率ゐて鐵條網の中へは入つたが、まだ命令を下さぬ中に突擊をして仕舞たので、此場合何といつても詮方ないので其吶喊の聲を目あてに、山腹を東方に斜行すること七、八十米突にして、夜はほの〳〵と白んでかすかに敵影を認め得たので。それッとばかり第一線の右翼から第四中隊を以て猛烈に突擊したが、敵の射擊が非常に猛烈であつた爲めに、一擧に敵中に突入することが出來なんだので。敵前約七、八十米突の所で停止して隊伍を整頓して、敵に向つて更に突擊せんとしたが丁度此時、敵が胸墻の上に出て來て射擊して居るのを見たる橘少佐は、それッあの敵を突き殺せとばかり更に突擊を命令して、率先刀を揮つて敵胸墻前に迫つたのであつたが。敵火益〻熾にして將卒の死傷益〻多く、敵前僅三、四十米突の間に集まつたる橘大隊は、敵の掃射に今一息といふ所で前進しかねて伏臥して居る。これを見たる橘少佐は大聲を以て全大隊を激勵して、單身猛然として蹶起して胸墻を超へ大刀をふりかざしつゝ敵中へ驀入した。敵は其銃劍を獨身挺進したる少佐に集めて突き殺さんとしたが、流石劍道に名を得たる同少佐これを左右に拂ひのけて、僅かに右腕を傷けられたに過ぎなんだが。此の指揮官の勇戰の模範に力を得たる第四中隊は我れ遲れじと敵壘に突入し。それより右翼に併列して居た第一線の三中隊も、憤進突擊盛んに勇戰奮鬪して終に此の勇將の部下たるに恥ぢず敵の第一散兵

壕を占領したが、それが午前の五時二十分であつた。

勇ましき壯烈なる戰鬪の後に此標高一四八高地第一散兵壕を占領した橘大隊は、爲めに其兵員は非常に減少して仕舞たので、更に突擊を其上にある敵の第二の散兵壕に決行するのは容易でない。然るに敵は頑强にも二三十米突を退ぞいて、第二壘を執念深くも占領して猛烈に射擊をするので、第四中隊長中村中尉に殘兵五十人程を糾合さして其第二壘に突擊せしめたが。彼れ中村中尉は獅子奮迅の勇を振つて遂に一時此第二壘をも占領したけれども、敵も中々の强者であつて其頂上の北端を占領して、くり返して恢復攻擊を幾度となく決行するので、人員少なき中村中尉部隊は殆んど志氣が萎靡して來た。橘少佐は傷をつゝんで大に之を勵激しつゝ、更に高瀨少尉に兵二十人を附して彼の敵の據れる頂上最北端を攻擊したが、其志を達するを得ずして敵の擊退する所となつた。折から彼我の砲彈は此の頂上に驟雨をなして落下する、狀況頗ぶる非であつたが、何分にも最初橘少佐の大隊が獨力占領したる而己

で、あとから增援する隊が全くないので、漸次に兵力が減少するばかりである所へ。敵は此陣地のとりやりが此方面の一大事といふので、大なる增援を得たらしく勢ひます〳〵我に不利なる有樣であつたが。そこへ第二大隊長鈴木少佐と相失なふて迷ふて來たる第七中隊が、折よく此高地の東南斜面に到著したがこれは不意に敵の增援と相衝突して、一たまりもなく擊退されて仕舞たので。最早到底此頂上は持ち堪へられぬと思ふ所へ、北大山の方からは非常な勢で側射をこゝに注ぐので、流石に勇敢なりし橘少佐も數彈のいたてに戰死を遂げ。中村中尉も重傷を負ふに至つたので、此高地頂上を再び敵の手に委するに至つたのは、三十一日午前六時三十分であつて、此の要地を一時三十分間占領して居たが後續隊のないために、終にこれを棄てざるを得なんだのは實に遺憾のきはみである。

然るに此日關谷大佐が攻擊命令を下すに當つて、本道を以て第一線兩大隊の境界としたのであつたが。第一大隊は本道より右方にある露軍の軍路を以

て本道と心得、又第三大隊長國司少佐は眞の本道を右にして進んだので、大切なる第一線の中央には大なるあき間が出來て仕舞た。そこへ豫備たる第二大隊は第一大隊と連絡を失なつて、鈴木則柯少佐はそれを尋ねる爲めに先行して居る中に、又其大隊と相失なつて仕舞たので。此の大隊も殘念ながら少しも第一大隊の勇戰に對して、機を失することなく援助を與へることが出來ず。第十一中隊と共に進んだ關谷聯隊長は第七中隊が敵と衝突して敗退するを聞き、其一分隊を殘してこれを山上に進めたが、時正に橘大隊が頂上を失なはんとする場合であつたので、多數の傷者の後退するばかりで殆んど手のつけ方がない。其中に關谷大佐は頗ぶる重い負傷をしたので事の成すべからざるを知つて、軍旗を其右に隣れる歩兵第三十三聯隊に托して、强て山上に向はんとしてこゝに戰死を遂げて仕舞い。國司精造少佐も第一線の第十中隊を失なつて、第九と第十二中隊を以て本道左側の敵壘を奪つたが、これも後援のない上に大隊長が數彈を受けたので其陣地を棄て、一度何れの方面でも

其山頂を占領しながら後續部隊のない爲めに各隊ともに山の中腹まで撃退されて、生殘りたる將卒の勇敢によつてこゝに其線を辛くも固持して居るといふ有樣であつた。

其後此の三十一日には北大山の方でも隨分激戰があつたが、僅かに敵壘の一端を占領した而已で、非常に多くの死傷を作つて夜になつたが。此夜敵が自から陣地を棄てゝ退却してくれたので、始めて第三師團は其目的の陣地を占領することを得たのであつて、其强襲も力攻も殘念ながら此の陣地の占領には何の甲斐もないといふことに了つたのであつた。

これを要するに此の兩日の第三師團の戰は、三十日の早朝に於て兒玉少將が前進を躊躇した爲めに、師團長の豫定の計畫に手違を生じたのが基となつて。最初兩翼隊に相併立して敵を攻撃せしめんとした大島大將は、狹隘なる向陽寺村東方東上勾附近へ更に歩兵第十八聯隊を使用するに至り。第五師團と第三師團の主力とはこゝに大混淆大紛糾をなして、益〻攻撃の進捗を妨ぐる

に至り。一方左翼隊の左方には非常に大なる空隙を生ずるの失態に陥り。翌三十一日拂曉を以て攻擊せんとするの計畫も、此夜間に於ける準備頗ぶる不統一にして、終に何れの方面も拂曉に於て充分なる成果を得る能はず。左翼隊が僅かに其獨力を以て標高一四八高地を占領したるも、兵力を右翼に重疊して使用せしめた師團長の過失によりて。此方面の後續隊を缺きそれを堅固に確實に占領し遂ぐる能はずして、再びこれを敵手に委するに至り、終に敵の自から退却するを待つて始めて全陣地を占領するを得たのであつて。最初の豫定通りに山口少將と兒玉少將を併立さして前進させ、敵陣地の高地脚附近に達したる時に於て、山口少將にも一聯隊兒玉少將にも若干大隊の兵力を增加し、自から黑牛莊附近に其豫備を握つて位置を定め。三十日に攻擊を決行すること能はなんだならば、更に三十一日の拂曉を期して兩翼隊に同時に攻擊を決行せしめ。軍より後步第二十二聯隊の增加があつたならば、それを黑牛莊又は向陽寺村西端附近に控置して、左右何れかの翼隊に增加するの時機を待つといふ手段に出でたなれば、此攻擊は遲くも三十一日の早朝に於て確かに成効したと評者は思ふ。此の計畫に出でざりしが爲めに評者の熟知せる友人や先輩だけでも、關谷大佐、橘中佐、前田中佐、高石少佐、那須少佐、澤井少佐といふ樣に澤山の勇士を失なつて居るのは。其戰の烈しかりしを證すると共に、最初第一番の過失者たる兒玉少將の、前進躊躇の責任の輕からざるを深く咎めざるを得ぬのである。

遼陽會戰後感而有作　成仁

優詔今朝發帝闕　將軍威武壓乾坤

南風八月關山露　十萬髑髏多淚痕

大正五年九月二十六日印刷
大正五年九月二十八日發行

（戰史評論奥附）

著者　無名戰士

東京市麹町區平河町四丁目十一番地
發行者　宮本林治

東京市赤坂區田町五丁目十一番地
印刷者　山田三次郎

東京市麹町區平川町四丁目
發行所　宮本武林堂
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

不許複製

遼陽會戰後感而有作　成仁

優詔今朝發帝關　將軍威武壓乾坤

南風八月關山露　十萬髑髏多淚痕

大正五年九月二十六日印刷
大正五年九月二十八日發行

十月刊行
戰史評論　豫告　奉天會戰韓城堡附近の戰鬪

著者　無名戰士

（戰史評論與附）

番地　治

番地　八郎

發行所　東京市麴町區平川町四丁目　宮本武林堂

電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

大正五年十月（奉天會戰韓城堡附近戰鬪　上）

戰史評論

大正
5. 12. 6
內交

宮本武林堂發行

戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第三十九回　韓城堡附近の戰鬪　上

毎々主張して居た評者がかねての主義に反して、今度此の評論紙上に於て、まるで時候の相合せざる奉天會戰の研究をするに至つたのは、これは實を申せば發行書肆武林堂主からのたつての懇請であつて、前月に於て是非この第四卷の終りに於て奉天會戰の一部を評論してくれとの相談があつたので、不相變何やかや自分の公務の都合などで、常に發刊の時期を遲延して迷惑のみをかけて居る義理合上、强てそれを拒絕して自分の主義を押し通すといふことは、頗ぶる出來憎くい場合となつて來たので、そこで今度は冬の入口なる

今日に於て春の初めに於て行なはれたる、奉天大會戰中の韓城堡の攻擊を研究して、第四卷の終りを結ぶといふことにしたのであつて、勝手な次第ではあるが何卒讀者諸公に於ても此意を諒とせられんことを切に祈る次第である。

閑話休題さて此の韓城堡の戰を研究するに當つて、突如として單に其攻略に關することのみを述べて見ても、それでは前後の關係が少しも不分明であつて、興味もなければ利益も少ないと考るから先づ此回に於て、概略にざつと奉天會戰に於ける第四軍の任務及び其行動の梗概を述べて、進んで第六師團の全行動の大要を研究しつゝ、漸次目的點たる韓堡城の攻擊に接近して、次號に於て愈〻韓城堡の攻略を評論することにしたいと思ふ。で此回は韓城堡攻擊の前記とでもいふ樣なものであつて、奉天會戰に於ける第四軍及び第六師團の戰鬪の研究が主なることになるのであるから、少しく名實相反するの觀があるかも知れぬが、何卒そこは脫線がちな例の評者の一癖として大目に見のがして頂きたいのである。

奉天會戰の初期に於て第四軍は如何なる配置にあつて、且つ如何なる任務を受けて居たのであるかといふと。此の滿洲軍の中央の鐵道附近を占領して久しく敵と相對して居たる、軍司令官陸軍大將伯爵野津道貫は其手中に第十師團、第六師團、大久保少將の指揮する後備諸隊と多くの重輕砲を握つて、前にも述べたる如く奉天街道と鐵道とを中央として、右翼虎盤山より起つて曼頭山後台を經て、左翼林盛堡に亘る線を頗ぶる堅固に占領して、二、三百米突から三、四千米突といふ極々近い距離をへだてゝ敵と相對峙して居たのであつて、其總兵力は步兵三十七大隊、騎兵三中隊と三小隊、重砲九十四門、山野砲百五十八門合計二百五十二門、工兵九中隊、機關砲五十八門といふ、隨分有力なるものであつたのであるが、明治三十八年二月二十日東煙台の總軍司令部に於て、各軍司令官を集めて軍事會議の開かれたる時に、此の野津第四軍は左の如き頗ぶる困難なる任務を課せらるゝことになつたのであつた。

『貴官は其軍を以て依然虎盤山より林盛堡に亘る陣地に在りて堅固にこれを

守備し全軍の兩翼に於ける繞回運動の奏功に先だち敵の我が中央に向つて突擊することあらば之を拒支し且つ何時にても我より進みて萬寶山を攻擊し得るの準備にあるべし』

一寸と此の命令の要旨を見ると左したることでもない樣であるが、其實大兵力を有するといふ程でない此の第四軍が、敵の正面前に位置して兩翼包圍の友軍の大膽なる運動中、その運動を妨げぬ樣に敵を自分の方に牽制するに勉めて、其上に萬一敵が中央から突擊し來つた時は、これを確實に喰ひ止めたる上時機があつたならば、更に萬寶山を攻略し樣といふのであるから、其任務は實に容易ならざるものがあつて、彼の步兵操典第二部第二十七に於て包圍に關して

『包圍ハ敵ノ正面ト側面トヲ併セ攻擊スルモノニシテ兩翼ヲ同時ニ包圍スルニハ著シク優勢ナル兵力ヲ有スルニアラザレバ正面薄弱トナリ危殆ニ陷ルノ虞アリトス』

と明記してある通り、兩翼包圍といふのは非常に敵より優勢の場合に執るべき攻擊方法である。然るに此の奉天會戰の場合には敵より殆んど三分の一位は少ないといふことを承知して居て、それで大膽千萬にも兩翼から敵を包圍するの策を立てたのであるから、其正面に當れる第四軍の任務は此條文に『正面薄弱トナリ危殆ニ陷ルノ虞アリトス』とある、兩翼包圍の弊害を一手に引受けることになるのであつて其困難は實に容易でない。優勢でも著るしい優勢でなければ正面が薄弱になる虞があるといふのに、劣勢である我軍から兩翼包圍をやるのであるから、其正面の薄弱は極端に達すべきは目前であつて。それが必然企てられ得べき敵の中央突擊を堅確に防止して、其上に敵を我が方面に牽制して置き、更に會〻時機の乘ずべき場合があれば、我から進んで萬寶山を占領し樣といふのであるから、此の野津將軍の擔任したる任務といふものは、實に容易ならざる困難なものであつたのはいふ迄もあるまい。

そこで第四軍は著々攻勢の準備を整頓して、牽制砲擊を主として決行すべ

き重砲諸隊の射撃準備を終りたる二月二十六日に於て、野津軍司令官は軍前面にある敵の兵力を概略五師團餘と判斷して、これを基礎として他日萬寶山攻撃を決行する場合に於ける、詳細なる作戰計畫案を決定して、此の二十六日に於てこれを部下各團隊に告知して、それ〳〵これを基として計畫する所あらしめたのであつたが、其計畫案の概要をあげてこれを研究するも亦一興と考へるから、今から其計畫案の概要を摘記して若干これを評論することにし様と思ふ。

第四軍作戰計畫概要

一、安東中將の第十師團(歩兵十三大隊、騎兵二中隊と一小隊、山砲二十四門、野砲三十六門、戰利野砲八門、重砲十二門計八十門、機關砲二十門、工兵二中隊)は主力を以て小東勾方向より先づ胡老屯次に萬寶山に向ひ攻撃前進し。右翼隊(約歩兵四大隊、騎兵二中隊、山野砲二十門、臼砲十二門、機關砲若干、工兵一小隊)は牽制兼助攻に任じ房身方面より柳匠屯に向ひ攻撃前進すべし其運

動を各期に分つこと大要左の如し

第一期間(準備運動及砲撃)

右翼隊を以て虎盤山より東勾山高地に亘る從來の陣地を守備せしめ主力たる自餘の諸隊は蛇山子、團山寺間に蔭蔽して集結す

蒲草窪南方高地より曼頭山の線上に砲兵を集め柳匠屯より胡老屯及其西方丘阜に於ける敵の防禦力を破壞する爲め砲撃を開始す

砲撃間緊要の地點に監視兵を殘し他は掩蔽部内に入り豫備隊は遠く後方又は側方に遮蔽し損害を減少すべし

第二期間(前進陣地の攻撃)

砲撃開始の第一日の夜又は翌曉に於て主力を以て小東勾より長嶺子山北麓に亘る線を占領し更に胡老屯及其西方丘阜に向ひ攻撃前進す

右翼隊は房身附近の地隙線に進出し塔山及び柳匠屯の敵砲火を此方面に牽き主力の攻撃を容易にし尋で柳匠屯に向ひ攻撃前進す

騎兵の主力は和尙溝にありて近衞師團と連絡を確保すべし

第三期間(本陣地の攻撃)

主力は胡老屯及其西方丘阜を堅固に守備して敵の恢復攻撃に備へ山野砲を小東勾附近に進め全砲火を主として萬寶山に集中し一部を以て柳半屯、長勝堡を射撃し其砲撃の成果を待ちて胡老屯西北及長勝堡東方より萬寶山に向ひ攻撃し一部を以て柳半屯の敵に對せしむ

右翼隊は柳匠屯攻略後は其砲火を沙古屯に集め奪取したる陣地は堅固に編成して敵の逆襲に備へ砲撃の成果を待ち更に沙古屯に向ひ攻撃前進す

此時機に於て敵が企圖することあるべき沙古屯方面よりする大逆襲に對抗する爲め第十師團砲兵の大部と其豫備隊の一部を常に此方面に準備しあるを要す

二、大久保少將の支隊(歩兵十二大隊騎兵二小隊山野砲四十八門重砲二十四門計七十二門機關砲十六門工兵三中隊)は全力を擧げ前三道崗子方面より先長勝堡後に三道崗子尋で魏家樓子西側丘阜に向ひ攻撃前進し後台北方の陣地にある部隊に限り第六師團と協力して沙河堡を攻撃せしむ

第一期間

各隊は現在の位置を守備して攻勢移轉を準備す

全砲兵を陣地に就け長勝堡、後三道崗子、萬寶山、魏家樓子西側丘阜附近の敵の防禦力を破壞せしむ

第二期間

主力は長嶺子山北麓より前三道崗子を經て其西側丘阜の線に進出し砲撃の成果を待ち長勝堡及後三道崗子を攻略す

後台北方陣地の後備歩兵一聯隊は最初第六師團と協力して沙河堡を攻撃す

第三期間

奪略したる陣地を堅固にして敵の逆襲に備へ砲兵を進めて魏家樓子西側丘阜を攻撃す

沙河堡を攻撃したる部隊は情況之を許さば支隊の左翼に連繫して桑欄子に向ひ攻撃前進す

三、大久保中將の第六師團は(歩兵十二大隊、騎兵一中隊、野砲四十二門、重砲二十二門計六十四門、機關砲十八門、工兵二中隊)は主力を以て于家窪子方面より先沙河堡及小孤家子を次に河北沙河堡及王孤家子に向ひ攻撃前進す

左翼隊は拉木屯、林盛堡の線に在りて射撃を以て師團の攻撃運動を援助す

第一期間

師團の主力は長興甸北方に移り左翼隊(約歩兵四大隊、騎兵半小隊、工兵二小隊)は拉木屯より林盛堡の線を守備し重砲の一部及野砲一中隊は此方面の敵と對戰す

多くの火砲を後台西南麓に集團して沙河堡、河北沙河堡、小孤家子、王孤家子及侯家窩棚の敵防禦力を破壞せしむ重砲も亦同一目的を以て射撃を開く

第二期間

主力は後台北麓より于家窪子西端に亘る線に進出し沙河堡及小孤家子を攻撃す

重砲の大部は師團主力の攻撃を助く

第三期間

攻略せる陣地を敵の逆襲に對して堅固に編成し其砲兵の全火力を河北沙河堡及王孤家子に集中し其成果を待ち主力を以て河北沙河堡に一部を以て王孤家子に向ひ攻撃前進に移る

重砲隊及び軍豫備隊に對する計畫も掲げてあるがそれは省略して、大體の此の計畫に就て一言其批評を試みて、更に此の評論の眞目的とする第六師團

の作戰計畫に付て詳細に研究して見樣と考へるが、非常に困難なる任務を受けた野津將軍は、それを完全無缺に果さんが爲めに苦心慘澹此の計畫を立てたのであつて、其計畫が餘りに細密に亘り過ぎて居るといふ缺點はないてもないが、此の位に詳細に規定してかゝらぬといふと此の樣な困難な場合には、容易に其任務を全くすることは難かしいのであるから、これは左して咎むることはあるまいと評者は思ふ。

大體に於て此の作戰計畫書を概言して見ると、我が第四軍の正面に於ける敵の最も堅固なる據點を萬寶山から沙河堡に亘るものと判斷して、比較的敵と接近の度の少ない第十師團を進めて柳匠屯、胡老屯を占領し、こゝに一部を止めて沙古屯の敵に對せしめて、其主力は萬寶山攻擊の爲めに左に方向を變換し、大久保支隊は前後三道崗子から長勝堡に達し、正面より萬寶山を攻擊して、其一部即ち後步第六聯隊を以て其正面に當る沙河堡の攻擊に參加せしめ。第六師團は左翼隊を以て林盛堡から拉木屯の間を占領さして、密そかに

其主力を長興甸の北方に移して、于家窪子、拉木屯の線から小孤家子及び沙河堡を大久保支隊の一部と協力して攻擊するといふ計畫であつて、要するに兩翼に第十師團の右翼隊と第六師團の左翼隊とを備へて、敵の逆襲等の場合に應ずるの準備をして、其他の全力を擧げて萬寶山、沙河堡の間に於ける、殆んど永久式なる堅き設堡陣地に據れる敵兵を兩翼包圍式に攻擊し樣といふ計畫であつて、全軍が兩翼包圍を企だてたる中央を引受けた此軍としては、勢ひ此樣なやり方をするの外に策がなかつたのではあらふが、左りとてこれが極めて適當なる方法であつたとは評者には贊成し兼ねる次第なのである。

故如何にとなれば、著るしき優勢でない我が滿洲軍を以て、大膽至極にも大山元帥は兩翼包圍を企だてたのであるから、必然的に此の中央牽制軍たる野津大將は、兵力大薄弱の頗ぶる危殆なる現況に陷るべき最困難地に立つたのであつて、如何に其兵力を全線にばらまいてあるいても諸方に空隙が出來るといふ樣な、非常な恐ろしい危險千萬な位置にあつたのであるから、可成

其兵力を集結して敵が企だてさうな此の中央の突破を堅確に豫防すると共に、機に投じて敵を萬寶山から驅逐せねばならぬのである。然るに野津大將は此の樣なる非常に困難なる立場に立つて居りながら、前面の敵の兵力を自己より優勢なる五師團餘なりと判斷したに關はらず、これに向つて大山元帥の頤に倣ふて兩翼包圍的攻擊を企だてたのであるから、左なきだに兵力の引つばり足りない第四軍は、愈〻以てそこら一面すき間だらけになつて仕舞たのは當然であつて。其上に三師團足らずの兵力の中から左右兩翼に八大隊を割き殘して舊陣地を守らせ、其餘の二十九大隊即ち約二師團半の步兵を以て、少なくも三師團以上の敵の據れる萬寶山、沙河堡の堅固無双なる敵の陣地を、兩翼包圍をやるといふ計畫を立てたのであるから、これでは到底其攻擊の目的を達せられ樣筈がない。果せる哉此奉天會戰に於ける第四軍の戰鬪は、惡戰苦鬪のあらん限りを盡したに關はらず、殆んど其目的として示されたる萬寶山には一指を染むることが出來ずして、敵が退却してから始めてこれを占領し

たといふ結果を來したのもゝ要するに此作戰計畫の至當でなかつたのゝ致す所であつて、これに就ては當時の軍參謀長たる野津司令官の愛婿、現參謀總長上原大將閣下が大に責任を負はねばならぬのである。

元より此軍の任務は非常に困難である、舊陣地に據つて默つて動かずに居れば、敵は其兵力を我が兩翼包圍の友軍の方へ向けるのは當然であるから、砲擊や攻勢の動作を以てこれを牽制せねばならぬが、左なきだに敵が機動に富んで居れば必ず決行する所の、我兩翼包圍成效以前に於ける中央突擊は此上もなく恐ろしいのであるから、無暗に牽制に骨を折り過ぎて求めて敵の中央突破を誘致する樣にしても大變である。此のかね合を考へて巧妙に敵を牽制すると共に、必要に當つては猛然立つて萬寶山を一擧に陷落せしめねばならぬのであるから、其困難や實に一通りや二た通りでないのであつて、多智大謀なる上原大將も流石にこれには苦心慘澹であつたのであらふ。

そこで今此の計畫の如く、殆んど其兵力を房身附近から林盛堡に亘る間に

平均に配布する樣にして、牽制任務と中央突擊の防禦とに當らしめて、愈〻萬寶山突擊の時機が到來した場合には、其兩翼に四大隊づゝの左右兩翼隊を殘して、敵の逆襲に當らしめて置いて、其中間にある主力の兩翼を進めて萬寶山と沙河堡に亘る線の敵を、兩翼包圍に陷れてこれを奪略し樣といふ計畫をしたので、これ實に已むを得ざるに出でたものであつて、詳細には規定せられて居るが、評者はこれは頗ぶる名策でない確かに下策であつたと思ふのである。

前面の敵陣地は約半年に亘る沙河冬營の對陣の間に於て、到る所が堅固無双殆んど半永久以上のものとなつて居る、果して何れが弱點であるかは容易にこれを知り難かつたではあらふが。去りとて平押し的に此の陣地を攻擊し樣といふのは、これは餘りに智慧のない話であつて、それでは到る所兵力薄弱なる爲めに、全然攻擊不可能になるの外はないのであつて、要するに此場合は事實殆んど其通りになつて仕舞つたのであつたが。何故に今少し兵力を

集結して敵の一點に向はしめて、それを突破したる勢に乘じて全軍の攻擊に移り敵を崩潰せしむるといふ策をとられなんだのであるか、若し此の策に出でたならば確かに今少し早く、目的の萬寶山を手に入れ得たに相違あるまいと思ふ。

これが爲めには先づ第十師團を房身から小東勾の線に進め、房身、于家窪子、林盛堡の線に據つて、敵陣破壞的砲擊はもとより百方手段を盡して敵を牽制するに勉め。其間に可成各師團の兵力を第十師團は團山寺附近、大久保支隊は黃花甸附近、第六師團は長興甸、三家子附近に集結し、此間我兩翼に連繫する第一軍と第二軍の戰況に間斷なく注意して、其進捗の速かにして敵の正面の大據點たる萬寶山、沙河堡の線を、幾分でも側背より脅威し得ると思はれる方面が出來たならば、思ひ切つて今集結させたる兵力中の二個即ち團山寺と黃花甸を合して柳匠屯に向ふか。或は又長興甸と黃花甸を合して沙河堡に向ふかといふ方法をとり、それに軍總豫備をも加へて猛烈果敢に右兩地點の中の一

個に向つて大攻擊を決行するのである。此間若し敵が反對の方から逆襲に轉じたならば、其場合には殘した一つの兵力の集結が其方面に應戰するのである、斯くしたならば隨分困難ではあつたらふが、沙河堡なり柳匠屯なり何れかは今少し早く我手に入つたであらふ、何れを得ても萬寶山は此の爲めに其側背が危くなるのであるから、そこで其機をはづさず正面の兵と相應じてこれを攻擊したならば確かに平一面の平押しよりはましであつたに相違あるまい。然るに敵情戰況の變化などには餘り重きを置かずして、最初から餘り詳細に攻擊の計畫を平押し式に豫定したのは、上原大將これは少しく大早計をせられたのではあるまいか。何れにしても自分は此の攻擊の計畫は餘りに平凡なるやり方であつて、且つ其自分勝手な規定は少しく早計に過ぎたのはいふ迄もないと信ずるのである。

上原參謀長が其一點に全力を注がずして、同時に萬寶山と沙河堡とを攻擊したのは此外にも理由があつて、左までに敵の陣地が堅固無双であるまいと考たのも其原因の一つであつたらしいが、假初にも近く敵と相對陣して五ヶ月間も居りながら、其防禦力の程度のどれ位であるといふ眞相を、詳細に知ることの出來なんだといふのは油斷である、此樣なことからして要するに小東勾東方から拉木屯に亘る、軍中央の主力全線を以て殆んど平押しに敵に迫つたのであつて、敵はそれ位のことにはびくともせず、我は散々に敵の火力の爲めに惱まされて、第十師團の如きは未だ敵の顏を見ぬ中に、其死傷は殆んど半數以上に上つたといふ大失敗。其樣なことから此の會戰後には故黑澤源三郎少將は、第十師團參謀長として其無益に多數死傷者をこしらへたといふ所から、上原參謀長のお覺へ頗ぶる芽出たからずして、遂に聯隊長に左遷せられるといふ始末であつたが、事實これは頗ぶる無理なる處分であつて、要するに黑澤參謀長もよくはなかつたらふけれども、其根源の責任は上原軍參謀長の此の作戰計畫書にあるのである。同大佐が此會戰後聯隊長となつて蠣崎現中將と交代して赴任する途中で、たしか鐵嶺南方あたりて評者は黑澤

少將に面會して、共に晝食をやりながら彼が此の會戰に於ける不平談を、約三時間程聽問させられたことがあつたが。何れにしても此の時に於ける第四軍の作戰の計畫は餘りに適當とは申されぬのである。つまり攻擊の唯一の要訣たる攻擊點に優勢なる兵力を用ゆるといふことを等閑にして、殆んど平押し的に普遍的に攻擊をしたので何れの點も敵を突破するの力が不足であつたので、敵の隨意に退却する迄沙河堡も萬寶山もこれを奪ふことを得なんだのである。但しこれには敵を牽制し又其逆襲に對抗するといふ大切な條件が附帶して居たから、爲めに其兵力を一地方に集結するといふことが自由でなかつたのであらふから、强ち理由なき失態とはいへぬけれども、今少し散漫の度を減じて兵力を集結して攻擊することは出來たに相違ないのである。

軍の作戰に關する大體論は先づこれ位にして置いて、今度は單に第六師團に對する攻擊計畫に就て今少しく詳細に研究して見樣と思ふ。于家窪子から林盛堡に亘る間の廣大なる正面を占めて敵と對峙して居た此師團は、御苦勞

にも態々其主力を長興甸の北方に移轉せしめて、好んで敵の防備の嚴重なる正面から敵を攻擊せずとも、樹林子、三家子附近に居る豫備隊を進めて拉木屯東方に集結して、先づ小孤家子を攻擊しこれを一先づ據點として更に沙河堡の西方に向ひ、後台北方に位置せる後步第六聯隊と于家窪子にある我師團の一部步の第四十五聯隊を以て正面から助攻せしめたならば、此の師團の攻擊は此の計畫よりはずつと容易であつたらふに、それを知らずして無理に其主力を斜右に行進させ後台から于家窪子西端の線に移し進めて、堂々と正面から眞一文字に沙河堡に向つて攻擊して、先づ取敢へず小孤家子を占領してここに足だまりを作り、更にそれから沙河堡の右側に主力を突進せしめるといふ策に出でなんだのは、これも確かに過失であつて敵の弱點に兵力を向はしめずして、求めて敵の最强部に攻擊點を選定したとの謗りは決して免がれることが出來まい。要するに此の計畫書に於て第六師團の爲めに定めたる攻擊方法も、評者は決して適當のものと思はぬのである、からして實施に當つて

殆んど此の方面からの攻撃は、敵に何等の苦痛をも與へ得ずして、第六師團は無益に澤山の損害を被むるに至つたのであつた。

作戰計畫に就ての研究は先づ此邊で切りあげて、さて野津軍司令官は翌二月二十七日拂曉より、總軍司令官大山元帥の命によつて第十、第六及び大久保支隊の各砲兵に命令して、敵の堅固なる防禦力に向つて緩徐なる射擊を開始せしめたのであつたが。速に研究の眞目的に接近する爲に他の師團の評論は一先づこれを他日に讓ることにして、愈々これから第六師團の方面而已に其研究を局限することにするが。此時に當つて第六師團は如何なる現狀にあつたかといふと、子家窪子には步兵第四十五聯隊(二中隊欠)が本道を中央にして位置して居り、右翼大久保支隊の後步第六聯隊と連絡し、其左沙河の南岸に沿ふて拉木屯西方に亘る間に、步兵第十三聯隊の第二、第三大隊が第一線となり、其第一、第二中隊が中央後に豫備となつて居る。其又左方鐵道の少し東方より林盛堡東方の沙河屈曲點迄の間には步兵第四十八聯隊(一大隊と一中隊欠)が位

置して、其左方林盛堡の村端北及び西の全部を步兵第二十三聯隊の第一大隊と第八中隊が占領して、近く第二軍の第二師團と連絡して居る。而して師團司令部は八家子に居つて、其豫備隊は長興甸に步の第四十八聯隊の第三大隊、三家子に砲兵第六聯隊第一大隊と戰利野砲中隊と步の第四十五聯隊の第十一、第十二中隊が旅團司令部と共に控へて居り、師團司令部のある八家子には步兵第十三聯隊の第三、第四中隊が護衛に任じ。樹林子には香川旅團司令部と步兵第二十三聯隊の第七中隊、同第四十八聯隊の第二中隊と徒步砲兵第一、第二中隊、同第二聯隊第五、第六中隊、攻城砲二門、野砲第六聯隊第二大隊とが居り。其後方柳三家子には步兵第二十三聯隊の第三大隊と第五、第六中隊が師團最後方の豫備隊として控へて居る、即ちこれが此の日に於ける故大久保春野大將の第六師團の現狀であつたのである。

砲擊の命を受けたる第六師團砲兵隊長原大佐は、午前八時頃より王孤家子北方の敵の砲兵、官屯と鐵道の間に居る敵の步兵線、英窩林盛堡間と鐵道、林

盛堡間の敵歩兵線等を目標として、山野砲を以て緩徐に射撃せしめ、徒歩砲兵には英窩附近の各敵砲兵と、林盛堡東北煉瓦工場のある敵の據點とを射撃さしたのであつたが、敵は靜まりかへつて少しも我が砲撃に驚ろける模樣なく、四方台東北の野砲四門が我が砲撃開始に遲るゝこと三時間の、午前十一時頃から一時間足らず鐵道橋の南方地區を射撃したのみで、頗ぶる間のぬけた張り合いのない砲戰であつたので、我諸砲兵も午前十一時半頃には遂に射撃を中止して仕舞たのであつた。

晝食が濟むとまた午後零時三十分頃から、第六師團の砲兵は砲撃を再興して、重砲兵は王孤家子北方、四方台東北及び英窩附近の敵砲兵並に林盛堡東北方の敵の據點を目標とし。又野砲は韓城堡東方、河北沙河堡の敵砲と英窩北方の敵重砲とを射撃したが。一體此日は奉天會戰の攻撃開始の日であつたのであるから、元より左まで に猛烈なる砲戰をするには及ばなんだであらふけれども、併し此日の樣な緩漫極まる砲撃をやるならば却てやらぬ方がましてあ

る。今から全線が攻撃に移轉するといふ勢を示す爲めには、晝食の時間に砲撃を休んでゆつくり茶漬を濟まして、更に午後の砲撃を開始するといふ樣な裕長千萬なやり方では何の役にもたゝぬのである。就中此の第四軍は正面牽制の大任があるのであるから、一層他軍より烈しく最初より砲戰を開く必要があつたのである、然るに此樣な砲戰をやつてのけたのは多分彈藥を惜しんだのが原因であらふが、これは大久保師團長も原大佐も大なる仕損じであると思ふ。爲めに敵からは全く侮どられて仕舞て、碌々應砲をもされぬといふ始末である。

我第六師團には否々我第四軍全部には正面の敵を牽制するの任務がある。その上に萬寶山を攻略するといふ任務をも負ふて居るのである。左すれば此の二十七日の攻撃開始の日から、眞に此の正面から攻撃を始める樣に、勇ましく其氣勢を示さねばならぬのであつて。斯くして我軍の方に充分に敵の注意を奪つて、兩翼包圍の繞回運動を容易ならしむると共に、我が此の砲撃を

以て敵の砲兵を誘致して、餘儀なく砲戰を開始せざるを得ざらしめて、早く其配備を察知するの手段を講ずるのが必要である。野砲操典草案第二部第七十一に

『前略　何レノ場合ニ於テモ機ニ先ンジテ過遠ノ距離或ハ小部隊ニ對シ若クハ敵ノ砲火ニ誘致セラレテ射擊ヲ開キ敵ヲシテ過早ニ我配備ヲ察知セシメザルコトニ注意スルヲ要ス』

と明戒してあるのは我砲擊のやり方によつては、敵を誘致することの出來るといふ反證とするに足るのである。然るに眠つた樣な砲擊を休み〳〵やる位なら、これは全然砲戰を開かぬ方がよかつたのである。といふのは敵は少しも此の我が砲擊に應ぜなんだのであるから、全然此日の此の砲擊は全く何の役にもたゝなんだのであつて、彈丸を無駄に費やしたといふ外には更に評すべき言がないのであつて、皮肉をいへば却て敵にこれは牽制の廣告だなと思はせたかも知れぬと評者は思ふのである。

此の第六師團諸砲兵の緩漫射擊は、我れを敵に輕侮させたと同樣であつたといふのは、此夜の沙河鐵道橋附近の不意の敵襲によりても證據だてることが出來るのである。敵は此の日の我が砲擊を以て全く威赫であつて戰意のないものと見くびつたのである。そこで我が無味意的に砲戰を行ふたる二十七日の夜に於て、皮肉千萬にも其歩兵を以て我が陣地中央の沙河鐵道橋附近に向つて、猛烈に一大夜襲を試みて我れの備なきに乘ぜんとしたのであつた、今から此の敵の來襲に付て少しく研究の歩を進め樣。

こゝに面白い暗合があつたといふのは、敵の方でも我が鴨綠江軍が遮二無二猛進するので、此の露軍左翼を攻擊する日本軍を牽制せよといふ命令が下つたことであつて。此の鐵道附近を守備して居た露の第三軍司令官は、此の意味頗ぶる不明瞭なる我が第四軍の二十七日の砲擊を見て、これは或は日本軍が其兵力を右翼の方へ密々移動せしめつゝあるのを、巧みに匿くさんとしてことさらに攻勢の準備でもあるかの樣に、此樣な砲擊をやつたのでないか

と考へたものであるから。此二十七日の夜に於て一度鐵道橋附近を攻撃し、其實否を確かめると共に命ぜられたる中央牽制をも兼ねて夜襲を企だてたのである。それが爲め晝間は極めて不活潑なりし敵の砲兵が、王孤家子東方と官屯南方と韓城堡東方の三箇所から、何れも野砲六門程で午後六時半頃から拉木屯附近を猛烈に砲撃し始め。それと同時に英窩北方に居た敵の重砲と四方台西方に居た敵の野砲も鐵道橋附近に向つて砲火を集中し、次で午後七時頃から敵の此方面の歩兵も一齊に烈しき射撃を開くに至つた。

前にも述べた通り此日此の鐵道橋附近を守備して居たのは、伊豆凡夫中佐(現少將)の指揮する所の歩兵第四十八聯隊の第一、第二大隊であつて、鐵道附近は第二大隊長野島貫一少佐が擔任して居たのであつたが、同少佐は第五中隊の一小隊を鐵道橋東北の松林に出して小哨とし、第六中隊の第一小隊を同鐵橋の西北端に更に同中隊の一小隊を橋の手前で西南方約二百米突を前の小隊より距てたる所に、殆んど相重疊する樣にして配備し、鐵道を跨ぎ鐵橋の正面に當る堡壘内には機關砲二門を備へ、其東方拉木屯から鐵道の間の本陣地には、第七、第八中隊を併列してこれを守備せしめて居た。而して其西方の東林盛堡の村端は同聯隊の第一大隊が確實に連繫を保つて占領し、第五中隊の二小隊と第六中隊の一小隊は、東林盛堡の東南端三叉路附近に在つて聯隊の豫備となつて居たのであつた。

人も知る口も八丁手も八丁の伊豆中佐のことであるから、萬事にぬけ目のあらふ筈がないのであつて、敵の夕方からの砲撃それに次ての歩兵射撃の開始を見て、これは必ず敵が夜襲を企だてるのであらふと想像して、其心構へをして居る中に射撃は益〻烈しくなつて、午後八時三十分頃になると敵兵約一中隊は他の若干の敵兵と共に、鐵道に沿ふて我が河向ふの松林の北端と鐵道橋の西北端に出してある二個の小哨に迫つて來た、すわこそ敵御參なれと本陣地を守れる第八中隊の二小隊は、直ちに起つて沙河の氷上を通過して、今敵の攻撃を受けつゝある第五中隊、第六中隊の各一小隊の小哨を赴援する。左

方奉天街道の東方後台高地上にある電燈班は、其强力なる電光を鐵橋前の松林前方に向けて、殆んど白晝の如くに皎々として敵の行動區域を射照した。此夜襲の主力となるべき敵の數隊の獵兵は全く此の電光に恐怖して仕舞て、一時は敵の銃火が殆んど衰ろへて、夜襲頓挫の有樣となつたのであつた。

敵は腑甲斐なき夜襲隊の有樣を見て憤慨し、これを激勵する爲めに射擊を再興した上に、其砲兵は多くの火力を後台に向けて電燈を撲滅せんと必死に猛射をなすと共に、溫盛堡附近にあつたる十珊知半の敵の加農は再び松林附近を烈しく射擊し出したので、一時我が電燈班の威光に躊躇した敵の夜襲隊は、午後十時頃猛烈に松林と鐵橋西北端の兩小哨に向つて突擊し來り、衆寡敵せずして兩小哨は松林内に退却して、そこに來援しつゝありたる第八中隊の二小隊と合して、必死に敵を此所より一歩も南進させじと防戰した。其中に午後十一時半になると第八中隊長笹倉大尉は、殘りの一小隊を率ゐて此の苦戰中の松林内の四小隊の所在に應援して、暗中に同地附近にある各小隊を

指揮して頑强無比なる防戰を繼續して居たが、其前後に於て後台高地の電燈班に於ては、敵が此の電光を目標として猛烈に射擊を集中するので、其射擊を困難ならしむるの目的で、斷續的に其電光を消したりつけたりして居たが、其中に忽ち機械に故障が起つて大切の場合點火することが出來なくなつて仕舞たのである。

丁度それが午前零時頃であつたが、此時には敵の兵力は鐵道の西側に約二中隊其東側に約三中隊あつたのであるが、電燈班の故障で暗くなつてから彼等は大に勇氣を回復したものらしく、零時三十分頃には其兵力六、七中隊となつて、猛然起つて我が松林内の笹倉大尉の指揮する部隊に肉薄して來て、暗中處々に接戰が始まり我が笹倉隊は非常に靱强なる抗拒をなしたけれども、三、四倍する敵の突擊には如何にしてもこれに對抗し兼ねて、殘念ながら松林内から退却して、更に沙河の北岸の斷崖になつて居る線を占めて、こゝに再び頑强無双の防戰を始めたのであつたが。此危急の場合を知つたる鐵道上の

塹壕內機關砲と、東林盛堡を守備せる諸隊は鐵道の兩側に向つて猛射を指向して、此の笹倉隊の健氣なる防戰を側方から援助したのであつた。

此急報を得たる聯隊長伊豆中佐は、直ちに豫備隊として手中にありし第五中隊(一小隊欠)を提さげて第二大隊の戰線に赴援し、樹林子にあつた香川旅團長は手許に置いた伊豆聯隊の第二中隊を、直ちに同聯隊に歸還せしめて其兵力を增加したので、伊豆中佐はそれを聯隊の豫備として、第五中隊(一小隊欠)を野島大隊長に還して敵を逆襲すべく命令し。師團長は其豫備隊なる步兵第二十三聯隊の第二大隊(第七、第八中隊欠)を左翼隊に增加したのであつたが。これが午前一時三十分から二時頃までの間の事であつたのであつた。

第二大隊長野島貫一少佐は第五中隊(一小隊欠)を得ると共に逆襲實行の命令を受け、沙河北岸の斷崖線の所で笹倉大尉の指揮したる隊を整頓せしめて、第七、第八中隊を中央として其東方に稍〻攻勢鈎形に新鋭なる第五中隊の二小隊を延伸的に增加し、左翼橋梁に近き方には前に小哨たりし第六中隊の一小隊

をこれに併列せしめ、午前二時三十分前進を起して第五中隊が先づ勇敢に松林の東端に迫つて手榴彈を投擲し、其左に連なつたる第八中隊、第七中隊、第六中隊の一小隊も、これに倣ひて烈しく手榴彈を投擲しつゝ天地を震撼すべき大吶喊をあげて、松林を奪ひたる敵の正面へ面もてもふらず突入したので、流石の敵も此の獅子奮迅の勢には敵すること能はずして、其大半は退却して仕舞たけれども、我が先に築きたる松林北端の掩體を利用したる敵の殘部は頑强に此の掩體に固著して防禦を繼續し、容易に全線を恢復することが出來ず、相接著して惡戰をして居る折しも、都合よく後台高地の電燈が再び明煌々として敵の背後を射照し出したので、明かに目標を認め得たる我が諸隊は、更に勇ましき手榴彈戰をくり返して敵を苦しめ、午前四時頃には漸くにして此の松林の北端を全部奪回したけれども、鐵道橋の西北端附近に固著したる六、七十人の敵兵は、斯くまでの窮境になつてもまだ少しも退却する模樣なく、死ものぐるいに我が野島大隊の左側から亂射を繼續したのには少なからず閉

口させられたのであつた。

其中に師團長から增援さしたる歩兵第二十三聯隊の第二大隊(第七、第八中隊欠)が、樹林子の香川旅團長の許に來著して左翼隊の豫備隊となつたので、漸くにして大に此の方面も心丈夫になつて來たのであつたが。此間師團長は各砲兵に命じて我が鐵道附近に火力を集めつゝある各砲兵と應戰せしめ、午前四時四十分頃より全力を擧げて猛射したので、敵砲兵は一時沈默した樣であつたが、これは火戰の準備を整頓したのであつて、暫時の後より頗ぶる熾んに應戰を始めて、彼我の砲聲は殷々として方十數里に鳴り響いたのであつたが。拂曉頃には自然に此の砲戰も一段落となつて彼我ともに射擊を止め、逃げそくなつて橋端に頑據したる六、七十の敵兵も手榴彈と機關銃の攻擊で散々な目にあはされて、午前六時頃に退却したが其大半は機關砲に依つて退却の途中で殺されて仕舞たのは自業自得とはいふものゝ實に無慘至極のことであつた。

くどい樣ではあるが何故に此樣な接戰が起つたかといふと、我が二十七日の晝間に於ける砲戰が頗ぶる緩漫を極めたので、敵はてつきりこれは我軍が其兵力を右翼へ移したのをかくす爲めに虛勢を張るのと判斷して、其自己の任務に敵を中央方面に牽制するといふ條項があるので、若し前面の敵の兵力を他方面に移したのを知らずに居ては大變と考へて、其偵察と牽制とを兼ねて中央からしてやつて來たのである。全軍兩翼の繞回運動を中央に於て間接に援助する爲めに、大々的大牽制をやらねばならぬ第四軍、就中其殆んど中央の要害を占めたる第六師團が、晝寢をして居て屁でもたれる樣な砲戰のやり方をやつたので、敵に全く其牽制であることを看破された而已か、更に敵から逆襲的に夜戰を持ちかけられて、振作されし我攻勢移轉の氣勢を挫ぢかれて仕舞たのは、要するに此の二十七日の砲戰の緩漫なりし過失から來たのであつて。牽制であることが敵に知れる樣な牽制は、やつて却つて害がある位のもので、やらぬ方がどれだけ利益かも知れぬのである。幸に敵が我が他

に兵力を移すと感違ひをしてくれたから、相當牽制の効があつたとはいふものゝ、これは過まちの功名といふもので何の役にも立つものでない。つまり働きかけ樣とした出鼻を敵からうまく一つたゝかれて、爾後の攻勢移轉を若干困難にしただけでも、第六師團は少なからぬ損害を被むつたのであつた。序であるからいふて置くが、此夜の電燈班の射照は敵を非常に恐怖せしめたものであつて、此の電光の爲めには勇敢の聞へ高き敵の諸獵兵も、非常に逡巡したものであつて、其突擊を實行したのは、此の電燈が消滅した爲めに出來たのであつて、若し此電燈にして消滅することあらずんば、此夜の敵の來襲は全く中止せられたかも知れぬのであつた。斯かる所から考へて見ると此樣な接近したる塹壕戰に於ては、電燈班たるものゝ効力も侮どることは出來ぬ實に偉大なものである。自分などは其當時或る地點で此の電燈班の前進を見て、要塞戰ではあるまいし何の役にたつものかと實はこれを嘲けつたものの一人であつたが。今其實効の斯く顯著であつたことを敵の戰史によつて承

知して、頗ぶる評者自身の見識の淺薄なるに恥ぢ入つた次第である。此戰に於て我が歩兵第四十八聯隊は六十五人の死傷をしか出さなんだが、敵は爲めに二百八十人の損害を受けたといふから、數字の上からいふて見れば此の夜戰も我軍の損にはならなんだのであつた。

翌二十八日には第六師團は殆んど前日と同樣なる有樣であつて、昨夜敵襲を受けた爲めに香川旅團に赴援せしめたる各隊を、今朝來何れも舊位置に復したる以外には、少しく昨日よりは其砲戰を活潑にやつたといふ外には何も特記すべきことがないのであつて。多少昨日よりは其砲戰が効力を現はしたのは事實であるが、三月一日になつて野津軍司令官が二十七、二十八兩日の砲戰を以て多少牽制の目的を達し得たものと判斷したと戰史の上に記してあるが、評者はこれは頗ぶる勝手なる判斷で其効力は少しく怪しいといふを躊躇せぬものである。就中此の第六師團の砲兵に於て最も然りである。一體野砲兵操典草案などの上には、砲兵の持久的の戰鬪のことに就ては頗ぶる記述し

てあることが少なく、單に第二部第七十に於て

『持久戰ニ在リテハ時トシテ遠距離ヨリ敵ヲ射擊シ以テ敵ノ近接ヲ遲緩セシムルヲ要スルコトアリ』

と示したばかりであつて、歩兵が別に持久戰といふ一章を設けて居るに對しては極めて不親切といはねばならぬのであつて、遠方から持久的の射擊をしたり又は敵を牽制する場合の多い砲兵に、此の一項の外に持久に關して示す所のないのは評者の不審に堪へぬ所であるが。此の兩日の牽制の場合各砲兵は同草案第一部第二百七十五の第二項

『直接ニ奏效ヲ期シ難キモ尙射擊ノ中絶ヲ不利トスルカ又ハ敵ヲ抑制スルヲ要スルガ如キ場合ニ於テハ要求ヲ充タスヲ度トシ爲シ得ル限リ速度ヲ減ズルヲ要ス』

とある原則に遵がつて緩漫至極の射擊をやつたのであるが、それを以て牽制の目的を達したと思ふたとは野津大將の判斷が何を根據としたかゞ自分に

は實に疑はしくてたまらぬ。最も多少といふ字を加へてあるから、左までに追窮するがものはないのであるが、此樣な砲戰のやり方をして居たならば、敵の方に我と同樣な牽制といふ目的があつたので、それで前面の敵が蹈み止まつて居てくれたからよい樣なものゝ。左なき場合には遠慮なく其兵力を我が繞回運動の方へ移動せしめるに少しも支障はないのであつて、殆んど何の効力もなかつたものと判決するのが公平至當なる批評であると評者は信ずる。然らば此場合砲兵なるものは彈藥の浪費を顧みずして毎日〳〵無暗に猛擊を繼續するのであるかと反駁を試みる讀者もあらふと思ふが、同草案の第二部第二十九に

『砲火ノ緩急ハ一ニ狀況ニ依ラザルベカラズ而シテ間斷ナキ射擊ハ縱ヒ其速度緩ナルモ尙彈藥ノ浪費ニ陷リ易キモノトス若迅速ニ效果ヲ收メントスルトキハ好機ニ乘ジ若クハ必要ナル時機毎ニ至短時間ノ迅速正確ナル射擊ヲ以テ敵ヲ壓倒スルコト緊要ナリ』

とある條文の示すが如く、何故に第六師團の各砲兵は其砲撃を間斷せしめつゝ、必要の場合又は好機を見のがすことなく、至短時間の迅速射撃をくり返して正確に行ふの擧に出なんだのであるか。斯くしたならば一方彈藥を節約し得て他方に於ては、敵を牽制するの効力も少なくなかつたのに相違ないのであるが、連續不斷ぽつり〳〵の寢屁的の緩徐なる射撃をやつて、多少たりとも牽制の目的を達したと判斷した野津大將の大膽さには、評者は啞然として呆れかへらざるを得ぬのである。

兩日の砲戰が効力ありしと見たる野津將軍は、二月二十八日午後十一時五十五分に大勾の軍司令部にて萬寳山攻撃の命令を下したが、其第六師團に對するものゝ要旨は左の通りであつた。

『第六師團は明一日其一部を以て拉木屯より林盛堡附近に亘る線を守備し主力を以て沙河堡方面の敵に對し攻撃準備を整へ且つ可成多數の火砲を以て拂曉より沙河堡、小孤家子及河北沙河堡附近の敵の防禦力を破壞すべし』

といふのであつたから、つまり前日と殆んど異なる點はないのであつた。けれども前の作戰計畫書の通りに左右兩翼隊に師團を分割して、香川第二十四旅團の各聯隊から第三大隊を控置して、それに騎兵半小隊と機關砲九門工兵一中隊(一小隊欠)を加へて、左翼隊として拉木屯から鐵道橋北方の松林を經て、左方林盛堡に亘る間を守備せしめてこれを援護隊として、石原應恒少將の歩兵第十一旅團に騎兵半小隊、機關砲九門、工兵一中隊を附して、後台西北麓より于家窪子を經て拉木屯東南に至る間に據らしめて、これを攻撃部隊とする豫定であつて、此の命令は三月一日午前四時三十分八家子に於て下したのであつて、其砲兵隊は一部を以て其正面に對して射撃せしめ、他の主力を斜め右方の沙河堡、河北沙河堡附近を猛射せしめて、其防禦力を破壞して將來の攻撃を容易ならしめ。各攻撃の準備を整頓しつゝ命令の示す通り全砲兵は此日は稍〻眞面目に射撃を決行したのであつたが、內部で諸準備をしたといふだけでまだ少しも進出はせなんだのである。

此様に我が第六師團の各砲兵は今日こそは充分に我砲火の威力を發揚して、敵をして愈〻本ものゝ攻撃が始まつたかと思はせる程に勇ましく戰かつたのであつたが。斯くなると敵も本氣を出してこれに對して重砲四中隊、野砲十四五中隊を以て應戰して、震天撼地中々頑强なる抗戰を試みたのであつたが。敵は流石に用意周到であつて彼れはいつか此の事あるべきを豫め想像して、其砲兵の全部が遮蔽陣地に布列して居た爲めに、我各砲兵からは少しも其陣地を望見することが出來なんだので、頗ぶる優勢なる砲兵を握つて居つたに關はらず此の第六師團は、殘念ながら終に敵の砲兵を默滅せしむることを得ずして、猛烈なる砲戰を交へつゝ夜に入るに至つたのであつたが。併し一方其防禦工事には少なからざる損害を與へたのは事實であつて、敵もこれには頗ぶる辟易したらしいのであつた。右様の次第であつたので各砲兵は夜に入つても各陣地にあつて、晝間と同様なる目標に對し緩徐なる射撃を繼續して、敵が既に破壞したる工事の修繕をやることの出來ぬ様にこれを妨害し、一方

後台にありし電燈班の半部は、終夜此方面の敵線を照明して、味方の砲兵に加勢し併せて其修繕工事に著手することの出來ぬ様にしたのであつたが。此日は此の位のことの外には何等前日と異なる程な戰況を呈するには至らなんだのであつた。

其夜は何等の異變もなく明けて三月二日の朝となると、前日來敵兵無慮一軍團程が此の第六師團の前面附近からして、奉天方向に退却したといふことを確かに知り得た。これ實に容易ならざる頗ぶる懸念すべきことであつて、若しも此の一軍團といふ莫大の兵力が敵の右翼に今や繞回しつゝある第三軍の方面へ、赴援する爲めに退却したものとすれば一方ならぬ一大事であつて、砲戰而已を能事として空しく時日を費やすべき場合でない。我が軍の中央方面に於て兩翼繞回の成效まで敵を牽制して引止めて置くといふことは、實に此場合非常に必要なる事柄であつて、若しこれが巧にやれなかつたとしたならば、それこそ全軍の大敗北を來すかも知れぬのである。而して其牽制の大

責任は誰でもない此の第四軍が双肩に擔なつて居るのである。左すれば砲撃といふ様な手ぬるいことではいけぬ、最早直ちに敵を攻撃して、彼をして餘儀なく此方面に停止して交戰せざるを得ざる様にせねばならぬ。その爲めには愈〻實際に於て昨日特に最後の準備を命じたる、彼の萬寶山、沙河堡の線の攻撃を決行せねばならぬ。そこで軍司令官は前晩の一日午後八時に於て、前黄花甸にあつて大概左の要旨の命令を第六師團に下した。

『第六師團は拂曉前于家窪子方面に其主力を集め沙河堡を攻撃し其左翼隊及重砲隊は現在の儘にて師團主力の攻撃を援助すべし』

といふのであつたが、こゝに始めて此師團は嫌でも應でも攻撃實行をせねばならぬ時機に達したのであつた。兼々豫定せられたる例の第四軍の作戰計畫は愈〻實施の機會を得て各團隊ともに、これが實行に著手したのであつたが、第六師團長大久保中將は此の午後八時の命令に基づいて同夜午後十時大要左の如き命令を下して、明日沙河堡攻撃の部署を定めたのであつた。

一、右翼隊ハ拂曉前勉メテ敵ニ接近シテ攻撃陣地ヲ占メ砲兵ノ射撃ト同時ニ沙河堡ヨリ小孤家子ニ亘ル敵陣地ヲ攻略スベシ攻撃間田上中佐ノ後備歩兵第六聯隊、機關砲二門、工兵一小隊ハ予ノ指揮ニ屬ス

二、左翼隊ハ現在ノ陣地ニ在リテ前面ノ敵ヲ牽制シ右翼隊ノ攻撃ヲ援助スベシ

三、砲兵隊ハ拂曉ヨリ其射撃速度ヲ増加シ兩翼隊ノ戰鬪ヲ援助シ殊ニ沙河堡、小孤家子附近ニ火力ヲ集中スベシ

四、豫備隊(歩兵第二十三、同第四十八聯隊ノ各第三大隊、騎兵一中隊(一小隊欠)工兵一小隊)ハ長典甸、八家子ニ集合シ在ルベシ

即ち例の軍作戰計畫を實行すべく其計畫の通りに命令を下したのである。此の命令を受けたる歩兵第十一旅團長石原應恒少將は同夜十一時三十分に命令を下して其實行に就き詳細に部署する所あり、翌二日の午前四時三十分を期して各隊の前進を起させ勉めて敵に接近して陣地を占むべく準備したが。

二日の其規定の時刻になると著々として此攻擊準備は實行せられて、田上中佐は後備步兵第六聯隊を以て最右翼に位置し、佟孤家子北方の地區から沙河堡の東南に對し。其左には太田朗中佐(現少將)の步兵第四十五聯隊が于家窪子北方地區より奉天街道を夾んで沙河堡の南方に向ひ。吉弘鑑德大佐の步兵第十三聯隊は更に其左に連なつて、于家窪子の西北から小孤家子に對して位置を占め。砲兵隊が後台及び拉木屯東方と樹林子から拂曉と共に射ちだす猛烈なる砲戰と共に、正々堂々と全正面からひら押的に攻擊前進をして、敵と勇ましく火戰を交へつゝこれに迫つたが。朝來どんよりと曇つて居た天氣は午前九時半頃から續紛たる降雪となつて全く通視を妨ぐるに至つたので、幸運にも我第一線の諸隊は損害を受くることなく敵前約四、五百米まで達し得たが、天佑はいつまでも續かず此の雪降りは暫時にして晴れたので忽ち敵の猛火を受け死傷續出するといふ有樣。これが午前十時前後であつて此間敵は小孤家子に兵力を增加した爲めに、最も多くの損害を受けたのは主力の左端に位置

したる步兵第十三聯隊であつて、雪の晴れると同時に停止して油斷なく急に掩體を構築したが、土地凍結して容易に作業が進捗せぬので、土嚢を後方から運搬して掩體を作るといふ有樣であつたので、其中に步兵第十三聯隊長吉弘大佐は負傷して古參大隊長木澤啓少佐がこれに代るといふ始末。天候の爲めに一時好望を以て敵に近接した師團の主力も全く此所に停止して、更に前進の時機を待つといふ有樣になつて仕舞たが。敵は此時機關砲を以て盛んに我を射擊したので、我が戰線の前後左右は全くこれに掃射せられて、單獨兵と雖ども行動すれば忽ち急速なる猛射に遭ふので、容易に身動ごきもならぬといふ困難、交通殆んど斷絕といふ有樣に陷つたが。此の時敵は韓城堡四方台の方から中隊位づゝに兵を分割して林盛堡前面の戰線へ數度兵力を增加して、此方面が非常に戰聲が烈しくなつたが。これは敵が猛進の氣勢を示して沙河堡攻擊部隊をこれによりて一時牽制せんとするの策に過ぎなんだのであつた。

以上の如き有樣で我第六師團の各聯隊が、舊陣地から大に進出して敵を距るゝ四五百米突の線を占めて停止した時。軍の第一線は殆んどこれと同じく前進して、右翼房身北方より胡老屯南方後三道崗子南方を經て、我が第六師團の戰線に連なり、全第四軍の正面を以て堂々と敵に迫つたのであつたが、其攻擊が餘りに普遍的平押であつた爲めに、到る所で敵に喰ひ止められて前進することが出來ぬといふ有樣。丁度此の時が二日の正午頃であつたが、大久保師團長の許へ其の左翼に接する第二軍の富岡支隊から

『第二軍方面ハ前面ノ敵兵退却シ唯今追擊最中ナリ』

との有望なる通報が來たけれども、如何せん前述の通り右翼隊の方が攻擊少しも進捗せぬので、これを如何ともすることが出來なんだので、直ちに石原少將に督促命令を送つて極力前進沙河堡の占領を促したが、其戰況が非常に難儀であつた爲めに唯だ互に火戰を交へて居るばかりで到底これを攻略するの場合に至らなんだ。斯くて攻擊準備の爲めに今朝來前進したる陣地を占

めて日沒に至つたのであつたが、其中に敵はまたぞろ一師團程の兵力を大蘇家屯の方から奉天に向けて退却せしむるの模樣であつた。そこで此夜も已むを得ず其儘に過ごしたが大久保師團長は何としても沙河堡を奪略せんとの決心堅く、二日午後九時更に翌日の爲め左の如き命令を下したのであつた。

一、右翼隊ハ强襲ヲ以テ沙河堡附近ノ敵陣地ヲ拂曉前ニ奪取スベシ

二、左翼隊ハ依然舊陣地ヲ守リ其一部ヲ以テ王孤家子ニ向ヒ助攻スベシ

三、砲兵隊ハ其一部ヲ拂曉前ニ于家窪子ニ進メ勉メテ兩翼隊ノ攻擊ヲ援助スベシ

四、豫備隊ハ拂曉前長興甸八家子ニ集合スベシ

石原少將は此命令によりて午前十一時に旅團命令を下し、種々に手段を盡して見たけれども其効なく、現狀を維持して時機を待つの外に策がなかつた。左方の香川少將も歩兵一大隊を以てこの强襲の助攻の爲めに河北亂木屯から王孤家子に向ひ、右方の田上中佐も協力して敵を攻擊せんと大に意氣込んだ

のであつたけれども、何分にも手の出し方がなくして餘儀なく日沒に至つた。

斯く何れの方面に於ても現狀維持の外なきにに至つたのは、これ實に戰史附圖の上で見ても知れる如くに、第四軍が一連不斷の廣正面から一齊に總攻撃をやつたのが、抑々の失策であつて到る所に於て其戰線の兵力薄弱の爲めに、難なく敵の拒止する所となつて仕舞たのであるが。併し此の第六師團の必死の攻撃企圖は敵をして非常にこれを懸念せしめたのであるから、其任務たる牽制の目的は幾分爲めに達遂せられるといふことにはなつたのである。

野津軍司令官は大小二百五十門の大砲を以て、一舉に敵の防禦力を破壞して其機に乘じて、軍の全力を以てひら押し的に總攻撃に轉じて、萬寶山一帶の高地を奪略するの考であつたが、敵の防備は頗ぶる堅固で味方の想像以上であつて、敵は巧みに我射撃の効果を避けて我を苦しめ、我はこれを强襲した爲にまだ第一線陣地にも達せぬ中に最早三千近い死傷者をこしらへて仕舞たといふ不結果であつたので。こゝに全く正面よりする力攻の効果少なきを

悟り、幸に第二軍が其攻撃著々進捗する有樣であるから、軍も其兵力の重點を左翼に移して、此の第二軍の右翼に連繫して敵を西方より壓迫せんと決心し。此の三日の夜に於て其策を定めて第六師團に兵力を增加し、機を見て第二軍に連繫して東北方に向ひ沙河堡方面の敵を側背より攻撃すべく訓令したのであつた。評者が先に此の作戰計畫書の餘りに單純にして、餘りに平等なる正面平押し的なるを非難したのは、此樣な結果を持ち來すべきを恐れたのであつたが。果然軍司令官もこゝに其策を一變して正面力攻を避くるに至つたが、これは遲まきながらも評者も至極同意である、そこでこれからそろそろ韓城堡の攻撃の段になるのである。

第六師團長は軍司令官の意圖を受けて、三日の午後六時に於て左の如き命令を下した、最も軍命令はこの師團命令と同時に下つたのであつたが、其前に既に內意を達せられたのでそれで早く師團命令が下せたのであつた。

一、右翼隊ハ依然于家窪子東北地區ヨリ河北亂木屯東北ニ亘ル線ヲ固守ス

ベシ

二、左翼隊ハ第二軍富岡支隊ノ右翼部隊ノ前達連屯附近ニ進出スルヲ待チ之ニ連繫シテ逐次方向ヲ右方ニ旋回シ林盛堡ヨリ韓城堡ノ方向ニ攻撃前進スベシ但シ拉木屯、鐵道間ニ一部隊ヲ殘シ右翼隊ニ連絡シテ其線ヲ固守セシムベシ

三、砲兵隊ハ重砲兵ヲ依然拉木屯、樹林子附近ニ野砲兵二中隊ヲ拉木屯東方ニ同一中隊ヲ同村西側ニ同各二中隊ヲ停車場附近及樹林子西方ニ布置シ午前八時ヨリ師團ノ左翼前及富岡支隊前面ノ敵ヲ射撃スベシ

四、後備歩兵第四十聯隊(第四中隊欠)同第二十聯隊第八中隊、騎兵一中隊(一小隊欠)工兵一中隊、衞生隊ハ豫備隊トナリ八家子及柳三家子ニ位置スベシ

此の攻撃命令は稍〻評者の同意する所であるが、前にも評者が述べたる通りに此の第四軍は、兵力の薄弱になり易い所の兩翼繞回の中央隊になつて居るのであるから。最初から彼の攻撃計畫書の樣に萬寶山を平押しにして、兩翼

から包圍する樣な大膽なやり方をせずして。中央及び兩翼に適當に有力なる豫備隊を蓄へて兩翼軍の戰況の變化を待ち、其進捗の著るしき軍と相連繫して沙河堡の側背なり又は萬寶山の側背を脅威し、敵の後顧に乘じて全力を擧げてこれを突破するのがよいといふたのは實にこれが爲めである。然るに案の如く正面よりの力攻は全く失敗に終つて、今度は第二軍と相協力して敵の沙河堡にあるものゝ左側背に向ふといふことになつたが、これは先づ以て評者の意を得て居るのである。併し何故に左翼隊全部に新に加はゝれる豫備隊の全力を加へて拉木屯から林盛堡に亘る正面を以て攻撃に轉ずるの策に出でずして、僅に鐵道の左方の區域に據る部隊のみを以て攻勢移轉に當てたのであるか。評者の考では右翼隊を牽制部隊にして、左翼隊に豫備隊を加へたものを以て、拉木屯から林盛堡に亘る線を以て猛烈に進出して、王孤家子、侯家窩棚、官屯を目標として、敵の萬寶山陣地の左側背を勇敢に攻略すべきであつて。それが此場合最も適當なる處置であつたと評者は信ずる。

何れにしても第四軍が攻勢に轉ずるには、他の友軍の戰況の進捗に據らねばならぬことはいふ迄もないことで、大山總軍司令官が時機を見て獨力我より進んで萬寶山を占領するの準備にあるべしと第四軍に命令したのも。機の乘ずべきがあつたならばといふ意味である、かくして時機の來らぬのに無理に獨立して强敵をしかも極めて淺薄極まる我戰線を以て攻擊し、且つそれを正面から平押にする必要はないのであつて、それであるから自分は彼の作戰計畫書は餘りに至當でなかつたといふに躊躇せぬのである。これからが愈〻韓城堡攻擊に關係のある戰況に移るのであるが、先づ今回はこゝて此の研究の筆を收めて、愈〻來月號即ち第四卷の最終號を以て、此の勇ましく且つ模範的であつたる韓城堡の攻擊を評論することにしたいと思ふ。

大正五年十二月四日印刷
大正五年十二月七日發行

（戰史評論奥附）

著者　無名戰士
東京市麴町區平河町四丁目十一番地
發行者　宮本林治
東京市赤坂區田町五丁目十一番地
印刷者　山田三次郎

不許複製

發行所　宮本武林堂
東京市麴町區平川町四丁目
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

何れにしても第四軍が攻勢に轉ずるには、他の友軍の戰況の進捗に據らねばならぬことはいふ迄もないことで、大山總軍司令官が時機を見て獨力我より進んで萬寶山を占領するの準備にあるべしと第四軍に命令したのも。機の乘ずべきがあつたならばといふ意味である、かくして時機の來らぬのに無理に獨立して强敵をしかも極めて淺薄極まる我戰線を以て攻擊し、且つそれを正面から平押にする必要はないのであつて、それであるから自分は彼の作戰計畫書は餘りに至當でなかつたといふに躊躇せぬのである。これからが愈〻韓城堡攻擊に關係のある戰況に移るのであるが、先づ今回はこゝて此の研究の筆を收めて、愈〻來月號即ち第四卷の最終號を以て、此の勇ましく且つ模範的であつたる韓城堡の攻擊を評論することにしたいと思ふ。

大正五年十二月四日印刷
大正五年十二月七日發行

戰史評論奥附

著者　無名戰士

戰史評論
十二月刊行　豫告　韓城堡附近の戰鬪　下

印刷者　山口三

發行所　東京市麹町區平川町四丁目　宮本武林堂
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

大正五年十一月（奉天會戰韓城堡附近戰鬪 下）

戰史評論

宮本武林堂發行

戰史評論

無名戰士評

成仁武夫補

第四十回　韓城堡附近の戰鬪　下

前回に於ては第六師團が其攻擊方法を變更して、再び前と正反對に左翼隊を以て攻擊部隊として、富岡支隊と相協力して攻擊を敵の右側背に決行するに決したといふ所まで研究したが、此の師團命令は四日早朝より著々として實施せられて、歩兵第十一旅團長石原少將は新に增加せられたる、野砲兵第十四聯隊の第一大隊を後台高地西南麓に陣地を占領させ、其他の諸隊は何れも從來の位置を守つて、正面から敵を牽制するといふ昨日とは全然正反對の行動を取り。又左翼隊長たる歩兵第二十四旅團長香川富太郎少將(現中將)は、

大正
5. 12.27
内交

三日夜の八時半に於て其旅團命令を下して伊豆中佐の指揮する、歩兵第四十八聯隊(第三大隊欠)、機關砲四門、工兵第二中隊の一小隊を以て、河北亂木屯より東林盛堡北方沙河の屈曲部迄の間に展開させて、鐵道から東の方には其一部を置きてこれには守勢を取らしめ。更に鐵道から西方には其主力を置きて巧に前面の敵を牽制させ、機を見て猛烈に之を擊攘させる樣に準備をさせ。香渡範三郎中佐の指揮する歩兵第二十三聯隊、機關砲五門、工兵第二中隊の一小隊には、林盛堡の村端に據り左方第二軍の富岡支隊と相連繫して、沙河堡の敵の側背に向つて攻擊を決行せしめ。殘餘の歩兵第四十八聯隊第三大隊、騎兵半小隊、工兵第二中隊(二小隊欠)、衞生隊半部を樹林子に置きて豫備隊としたのであつたが。此の香川少將の命令によつて如何なる配置をしたかといふと、兩聯隊は實に左の如き配備をとつたのであつた。

則ち伊豆中佐は依然從來の通り河北亂木屯から鐵道に至る間を歩兵第四十八聯隊第二大隊(第五中隊欠)と機關砲二門を以て守らしめ。同第一大隊と機關

砲二門、工兵一小隊を以て東林盛堡北方村端の陣地を占領させ、第五中隊を豫備隊として鐵道附近に置いて自からも其附近に位置したが。幾分攻擊の意味を含める此の聯隊の豫備隊がたつた歩兵一中隊とは、實に手薄なものであつて情けない樣な感じがするのを禁じ得ないのである。そこで其左に併列すべき香渡中佐は如何にしたかといふと、歩兵第二十三聯隊第一大隊と機關砲三門を大隊長少佐鵜殿輝長に指揮せしめて右翼第一線とし、同第二大隊と機關砲二門を大隊長少佐中屋則哲に指揮せしめて、これを左翼第一線としたのであつて、此の兩大隊を展開して林盛堡の北端を占領せしめ、同聯隊第三大隊を左翼後に控置して豫備隊とし、何時にても攻擊前進の出來る樣に準備をして拂曉を待つたのであつたが。敵も中々に油斷はなく午前五時過ぎ少しく物のあいろが見へる樣になると、沙河堡から小孤家子附近の敵の歩兵と官屯附近の敵の砲兵とは、我石原右翼隊に向つて猛烈に射擊を開いて其前進を妨げるの手段に出で。次で鐵道附近の敵の歩兵と英窩、韓城堡附近の敵砲兵も我が

左右兩翼隊の中間邊に向つて射擊を開始したが。我が第一線諸隊は泰然として靜まりかへつて少しもこれに應射をせなんだのであつた。

四日の午前八時になると師團命令に依りて、師團砲兵隊長原大佐は射擊を開始せしめたが、先づ樹林子北方に布列せる徒歩砲兵第一聯隊第一中隊を以て、四方台北方の敵砲兵を制壓せしめてこれを手始めに。午前九時頃には王孤家子東方にて必死作業中の敵兵を射擊して潰亂に陷らしめ、次で樹林子南端に位置せる攻城砲と相協力させて前達連屯を射擊して、我左翼前にあつて富岡支隊の前進を妨げる敵兵を猛烈に攻擊し。又拉木屯東南の徒砲第二聯隊第六中隊も午前八時から官屯附近の敵砲兵を、同村西南にある同聯隊第五中隊は午前十時頃から、韓城堡北方の散兵壕と英窩附近の重砲とに向つて射擊を加へ、其攻城砲は前後達連屯方面の敵を射擊して、大に富岡支隊の爲めに加勢をなし。別に沙河停車場附近に布列したる野砲第六聯隊第二大隊(第五中隊欠)を以て、午前八時より東林盛堡北方の敵の散兵壕を、同九時半より樹林

子西方の同第五中隊を以て前達連屯を、吉祥屯東北の戰利野砲中隊を以て林盛堡北方の敵歩兵を射擊し、隨分と猛烈に敵に各方面から集中砲擊を加へたのであつた。此の上に野津軍司令官は敵情を偵察するの目的を以て、午前十一時から軍全砲兵をして約三十分間の射擊をさしたので、其砲擊の爲めに我が戰線は極めてにぎやかなものであつたが、これに應戰した敵砲兵は塔山から英窩に亘る全正面の處々からぽつり〳〵とやつたのであつたが、其應戰は極めて活潑でなかつたので、軍司令官偵察の目的はまんまと失敗に終つたのであつた。

斯くて富岡支隊の進出を今か今かと待つ中に、午前十一時頃から前達連屯双台子、邵家林子に亘る間の敵兵が續々として退却を始めて、午後一時三十分には數群に分れたる敵兵が東店子から南達子營方向に退却し、午後三時半頃には別に邵家林子から約一聯隊の敵兵が北方に退却し、同時刻頃後達連屯からも多數の兵が東方に退ぞき、又我が第六師團左翼隊正面の四方台からも正

午前後に約一旅團の敵兵が退却したのを見た大久保第六師團長は、好機逸すべからず此時を以て前進を起すが大得策と考へて、午後零時四十分に於て第二軍の支隊長富岡三造大佐に向つて至急の傳令を發し

『貴隊前面ノ敵兵ハ北及ビ東ニ向ッテ續々退却シッヽアリ貴官ノ速ニ其右翼隊ヲ後達連屯ニ前進セシメラレンコトヲ切望ス』

といふ意味の通報を送つて前進を求め、其勢に乘じて香川少將の左翼隊をして攻擊前進を起させ樣としたのであつたが。當時富岡支隊はまだ第四師團長の令下にあつて、第四師團の右翼隊と此の富岡大佐の左翼隊と相協力して、達連屯、双台子附近の敵を東北方に擊退するの準備中であつたので、終にこの大久保中將の要求に應じてくれなんだので。獨力前進して見ても隨分と危險なる情況であつたから、第六師團も已むことを得ず其儘にして居るの外に策がなかつたのであつた。

此時第六師團の左翼隊最左端乃ち香渡中佐の居た邊からは、丁度前後達連

屯、双台子、邵家林子などが同一線上にあつたので、極めて明なる其動靜を望見することが出來たのであつて、逸早くも敵の退却を發見して富岡支隊に報ずることが出來たのであつたが、何故か富岡支隊は前進して此の敵の棄てゝ退ぞいたる、前後達連屯、双台子の線を占むることを承諾せなんだ。此時既に第四師團の左翼隊は來勝堡を略取し、須永少將の指揮する右翼隊は午前十時から邵家林子を攻擊して居たのであつて、これが爲めに敵が續々退却を始めたのであるから。今第六師團長から敵の退却を報じて前進を求めた時に、直ちに起つて前進を起したならば何等の困難なくして、富岡支隊は午後三時前後までには容易に、前達連屯、双台子、邵家林子の線に進出するを得て、來勝堡、邵家林子、林盛堡といふ樣な一大彎形をなしたる戰線を形ちづくることが出來たのであつたが。それにもかゝはらず富岡支隊は須永少將の隊と協力して前面の敵を攻擊する準備中といふことに名を借りて、ずつと後退したる位置にへばり付いたまゝ、終に此日は此の線まで進出するに至らなんだのは實に情け

ない煮へ切れぬやり方であつたと評者は口惜しく思ふのである。

一體富岡支隊は相當の兵力を持つて居るのであるから、敵が漸次退却してゆくのが知れたならば、直ちに前進してこれに追躡すべきが至當であるのに、それに三家子、大小武鎮營の線にすまして停止して居たのは何のことであるか。第六師團の左翼隊は林盛堡の西端に攻擊の準備をして構へて居り、又左翼には第四師團の右翼隊が邵家林子を占領したのであるから、其間に居る敵兵は油斷をして居れば全然包圍に陷るの危險がある。であるから午前十一時から退却をし始めたのであつて、其模樣は或は後方にさがつて居た富岡支隊からは知れなんだかもわからぬが、午後一時前後には大久保中將が親切にも其敵の退却を通報して、富岡支隊の前進を希望したのではないか、それに少しも耳をかさずして他の口實を以て矢張其儘動かずにしまつたのは不都合である。富岡支隊の前進が遲延せなんだならば、第六師團の左翼隊も其儘右に連なり相協力して、此日の中に大に戰況を進捗せしめ得たらうに去るにても惜しい

ことをしたものである。これ要するに富岡大佐の油斷といふの外はあるまい、尤も此時はまだ富岡支隊は第四師團へ屬して居たのであるから、それが第六師團長の一片の通報で動作するのは可笑しいといふ樣な、全く形式的なへんてこな考も加勢をして、それで此樣な不始末をやつたのであらふが。何れにしても遺憾千萬なことであつて、戰史附圖の上で見ても敵に遠くはなれて物好きにも、半圓形をなして此夜後方に停止して居た富岡支隊の有樣は實に滑稽千萬である。

『戰鬪後ハ勝者ノ疲勞モ亦大ナリト雖敗者ハ體力氣力共ニ一層困憊シ其疲勞ハ殆ンド極度ニ達スルモノナルガ故ニ勝者ハ一意追擊ヲ續行シ以テ最終ノ勝利ヲ完ウスベシ此際各級指揮官ハ部下ニ對シ過劇ノ動作ヲ要求スルコトヲ避クベカラズ』

とは步兵操典第二部第七十六の示す所の追擊に對する金科玉條であつて、敵は今敗退といふ程度にはあらずとするも、殆んど林盛堡と邵家林子とから

兩翼を包圍されて退却を始めたのであるから、其機に乘じて正面から此富岡支隊が前進を勇敢に決行してくれたならば、敵の退却は非常な困難に遭遇したに相違ない。然るに他からの注意と希望を受けても尙且つ前進を躊躇逡巡して、折角袋に入れかけた敵を安泰に退却せしめた而已か第六師團の香川旅團の張りつめて居た攻擊氣勢も、此の支隊の前進遲延の爲めに此日は終に使用することが出來なくなつて仕舞たのは。要するに失禮ながら富岡三造大佐が此條の末文の戒を忘れて、餘りに部下を可愛がり過劇なる動作を部下に課するのに忍びずして、口實を設けて前進をせなんだのゝ致す所といはれても一言ないのであつて、これは實に殘念至極なる大失態である。此樣なことは場合によると他の非常なる誤解を蒙むつて、思ひもよらぬ臆病未練などの謗りを受けることになる虞れがあるのである、青年將校たるもの豈に深く戒めざるべけんやである。

此樣な次第で第六師團も富岡支隊も殆んど晝間の位置にあつて夜を徹した

が、此日富岡支隊は轉じて第六師團に增加せられたので、大久保中將はこれをも其計畫に加へて明日の攻擊繼續の準備をして居たが、午後六時頃に一師團以上の敵兵が官立屯から西店子を經て、北方に退却するのを確實に見たので戰況益〻我に順境なるを知り、大久保中將は直ちに兩翼隊長に左翼にある友軍の戰況如何にかゝはらず、苟くも時機を得たならば其機を逸せず速に攻擊に轉ずべきを命令したのであつたが。此の夜午前零時二十分頃になると、思ひ設けぬ林盛堡北方にある所の敵兵は突然不意に猛烈なる射擊を始めて、今にも彼より攻擊をして來さうな有樣を示したのであつた。

既に四日夕に於て砲擊準備をして居たのであるから、此の射擊を以て正に我第六師團の五日に於ける攻擊の開始と信じたる、御影池重砲兵隊長は徒砲第一聯隊第一、第二中隊を以て猛烈に英窩を射擊して第一線步兵に援助を與へたが、午前二時前後になると敵の射擊が次第に衰ろへて來たので、これは變だと考へて斥候を放つて見ると驚くべし、前面の敵陣地には敵の大部隊は全

く居らぬことが知れた。そこで直ちに此の左翼隊は進んで敵の陣地を占領して見ると、何でも前の英窩にも敵が居らぬ樣な氣がするので、香渡中佐は其第一中隊を英窩方向に、他の一小隊を官屯方向に派遣し、伊豆中佐は第四中隊を英窩に他の一小隊を四方台方向に派遣して、何れも敵情を偵察したが。英窩に向ふたる兩中隊はこれを守備したる約一中隊の敵を驅逐して之を占領し、第四中隊は獨り殘つて英窩を守備し、第一中隊は分捕りしたる十珊知半加農を牽引して、其本隊に歸還したのであつたが、敵は歩兵操典第二部第七十四の第二項

『敵兵退却ヲ行ハントスルニ方リテハ故ラニ一部隊ヲ以テ我ニ向ヒ逆襲シ其機ニ乘ジテ戰場ノ離脱ヲ圖ルコトナリ夜間又ハ濃霧ノ際ニ於テ特ニ然リ此ノ如キ場合ニ在リテハ其逆襲ニ牽カレテ追擊ノ好機ヲ逸スルガ如キコトナキヲ要ス』

とある條文の通りに敵は射擊を以て攻勢の眞似をやつて、其間にそつと我

を離れて退却したのであつたが。其機に乘じて敵を急追することに氣著かなんだ、第六師團諸隊も富岡支隊も頗ぶる大ぬかりの大倦急といはねばならぬ。況んや師團長からの特別の注意のあつたに於てをやである。唯間違ひからして敵の射擊を味方と感違ひをなし攻擊開始と誤解して、英窩に向つて重砲猛擊を決行したる御影池大佐は、過失の功名ではあるけれども爲めに敵の退却を非常に狼狽せしめた、といふから其効果は相當に大なるものであつたが。これも敵の退却の爲めの逆襲とは毛頭思はなんだのであつたから、これも全く偶中の僥倖であつて、劣等射手が射琛をはづした彈丸で雉子がとれたと一般、何の後來の爲めにもならぬ滑稽である。此の樣な月なみな窮策を弄しつゝ退却する敵に對して、何等大なる妨害を與へ得なんだのは香川、石原、富岡の三將の大油斷であつて、實に千歳の遺憾であると評者は思ふ。

前にも操典の條文を引用した如く退却をする場合に、一時攻勢の態度を現はして我の追擊を躊躇せしめ、其間に乘じて退却を決行するのは新らしいや

り方ではなく、古來慣用の退却掩護の一手段である特に夜間に於て然りである、それに戰場老功の名を得たる古强者の富岡三造大佐も、石原、香川の兩少將も現に四日の晝間に於て、續々敵の奉天方面に向つて退却するのを見て居りながら、此の夜間突然の攻擊が退却を蔭蔽する爲めの陽攻動作であるといふことに、一人も氣がつかなんだといふのは實に殘念千萬である。就中これを以て其攻擊が敵の眞面目の攻擊開始と心得て、暗中の大砲擊を決行したる御影池大佐などに至つては、全く以て戰術なるものには甚だ緣の遠い人であつたものと見へる、これ要するに各官が步兵操典第二部第二十二に於て

『戰勝ヲ豫期シ得ルニ至レバ各級指揮官ハ時機ヲ失セズ追擊ノ準備ヲ爲スヲ必要トス此際各級指揮官ハ成ルベク前線ニ在ルヲ要ス』

とある注意を顧慮せずして、敵の非常に頑强なる抵抗の爲めに攻めあぐんで仕舞て、現在敵が續て其兵力を後方へ移動せしむるを見て居りながら、尙ほ且つ此の夜間の突然の攻擊動作を以て、全く我れを欺瞞するものであるといふことを看破し得なんだのは、これ實に疲勞と油斷の爲めに敵情を偵察する斥候の使用が不充分であつて、其上に各級指揮官が近く前線に進んで位置しなんだ爲めに、大切なる敵情の變化を知ることが出來なんだのであつて、評者は實に此の夜に於ける富岡支隊長と第六師團各隊長との、餘りに敵に甘く見られ過ぎたのを情けなく思はざるを得ぬのである。

話しが少しあと戻りをするが、軍司令官は敵の大勢退却に傾きたるを看破して、前日に於て第四師團と富岡支隊を增加せられたる勢に乘じて、敵を東北方に大壓迫し去らんとして、四日の午後三時に於て軍命令を下したのであつたが。其の命令に接したる第六師團長大久保中將は、其部下と新に指揮に入りたる富岡支隊に向つて四日午後四時三十分、即ち軍命令の出た一時間半の後に於て左の如き命令を下して、五日に於ける師團の攻擊部署を定めたのであつた。

一、師團ハ明日前面ノ敵ヲ驅逐シテ吳家屯、鮑家窪子及ビ毡匠堡子ノ線ニ進

出セントス

二、左翼隊ハ前面ノ敵ヲ驅逐シ英窩、官屯ヲ經テ鮑家窪子ニ向ッテ前進スベシ

三、右翼隊ハ左翼隊ノ王孤家子附近ニ進出スルヲ待チ前面ノ敵ヲ驅逐シテ桑欄子ヲ經テ吳家屯ニ向ッテ前進スベシ

四、富岡支隊ハ双台子後達連屯附近ノ敵ヲ驅逐シ四方台、韓城堡ヲ經テ毡匠堡子ニ向ッテ前進スベシ自今後歩第四十聯隊第二大隊ヲ同支隊ニ增加ス

大略以上の如く其部署をとらしめて豫備隊は依然八家子に置き、各砲兵に命じて前日即ち四日の夕方から其攻擊を射擊を以て準備させたのであつた。

そこで此命令を受けたる右翼隊長石原少將は如何にしたかといふと、四日の午後七時に命令を下して、攻擊中自分の指揮に屬せる大久保支隊の左翼隊に命じて、歩兵第四十五聯隊に連繫して前面の敵を驅逐して桑欄子に向はしめ。又歩兵第四十五聯隊長太田朗中佐には同聯隊(第十一、第十二中隊欠)と機關

砲四門とを以て歩兵第十三聯隊に連繫して沙河堡の敵を擊攘して、進んで河北沙河堡を占領せしめ。歩兵第十三聯隊長代理木澤少佐には、同聯隊(第三、第四中隊欠)と機關砲五門を以て、左翼隊が王孤家子附近に進出するを機として、猛然前進を起して桑欄子を經て吳家屯に前進せしめ。砲兵第十四聯隊第一大隊の後台西方の陣地にあるものをして此攻擊を援助せしめて、其豫備隊即ち歩兵第四十五聯隊の第十一、第十二中隊と歩兵第十三聯隊の第三、第四中隊、騎兵半小隊を于家窪子に位置せしめたのであつて、これが石原少將の五日に於ける部署の大要であつたが。此命令を受けたる後以前から陣地に就て居た第十三聯隊第一大隊長大島少佐、其大隊(第四中隊欠)を以て左翼隊の攻擊に協力せんが爲めに、午前三時頃少しく其線を前方に進めて敵情を探り。又野砲第十四聯隊第一大隊と第一線の歩兵部隊とは、午前六時から石原旅團長の命によりて猛烈に射擊して敵情を偵察したが、何等有益なる情況を知るを得なんだのであつた。

温厚の君子ではあるが高崎生れの上州きつすいの石原少將のことである、敵情が不明であるからといふて逡巡する樣なことはせぬ、今行ふたる歩砲の偵察的射撃の結果によりて、沙河堡から小孤家子にかけての敵の兵力が少しく減じた樣な有樣なのを知つて。機を見て直に敵に向つて前進せんとして、午前八時更に第一線の歩兵火を活潑にして以て該兩村を猛射せしめ、勇敢にも攻撃前進を起さんとしたが師團長はこれを許さずして、時機尙早として斷々乎としてこれを決行することを承諾せぬ。一時は憤慨して無斷で前進せんとまで激したが、由來軍紀を重んずる石原少將のことであるから終に其儘こゝに立ちすくんで仕舞たのであつたが。此の場合まで香川旅團の右翼部隊が前夜の約束の如く、王孤家子まで前進せずして侯家窩棚の南方に居た場合であるから、如何にもそれが王孤家子に出るのを待つて前進するといふかねての約束に照合しては、たしかに多少尙早ではあつたに相違ないが。さればとて折角の企を抑止して強て其志を行なはしめぬと迄、手ひどくこれを禁止するには當らぬと評者は思ふ、然るに師團長は何の見る所があつてか知らぬが、その前進を殆んど抑壓的に中止せしめたのは評者は頗る同意が出來ぬのである。

元より命令の上に於ての約束も大切であるが、それかといふてそれを死守するといふのも愚な話しであつて、香川少將の方が前進が餘り速かでない上に、石原少將の方面は敵が少し減じた樣なので、左翼隊の前進を間接に援助するの考を以て、午前八時から沙河堡王孤家子にその彈雨の大御馳走を飛ばして置き。今にも前進せんとする勢を見せて、敵の膽をしてぶる〳〵する程に驚かしたのは、全く其牽制の任務に適當なるやり方であつて。此勢に欺むかれて此の方面へ敵が兵力を移し集めることになると、香川少將の旅團は非常に其前進が容易になる。そして此の香川左翼隊の進んで王孤家子に達するを待ち、猛然起つて前面の敵を驅逐して豫定の如く。小孤家子、沙河堡から桑棚子、吳家屯に進んだならば、それこそ理想通りであるから師團長たるもの、

此の石原右翼隊の眞面目に前進の氣勢を示して射擊を沙河堡桑欄子に向けて猛烈に開始したのを、默まつて今少し見て居ればよかつたと評者は思ふ。牽制らしい戰をすれば敵は決してこれに欺かれるものではない、そこが呼吸である要訣である大切な所である。然るにそれを關東武士の猪突をやられては大變と、大久保中將が餘りに大事をとり過ぎて、時機尙早しとして强てこれを抑止したのは至當でない。此の因循不理解なる師團長の抑止が抑〻の原因となつて、石原少將の右翼隊は全く此の五日一日少しも其位置を進めることが出來ずして、終に日沒まで何等の爲す所なく徒らに敵彈の下に大欠伸をやつて居たのであつて、此の大久保師團長の抑止的干涉は評者は大に不同意である、今少し勝手にやらせて見ればよかつたのであつた。

師團の砲兵隊長原大佐は前日夕にも準備射擊を少しやつたが、此の五日にも御影地大佐の重砲隊に王孤家子、官屯、四方台を射擊せしめ。野砲第一大隊に王孤家子、官屯を、同第二大隊に四方台を目標として配當して、早朝より射擊を開始したのであつたが、午前六時四十分に戰利野砲中隊を林盛堡西南端に進めて敵に近づき。更に午前七時前後に英窩の我手に落ちたるを知ると同時に、沙河停車場附近にあつたる第四、第六兩中隊を進めて、河北亂木屯西方に位置せしめ、全力を盡して步兵攻擊の爲めに砲擊を繼續したのは適當であつた。但此場合御影池大佐が徒砲第一聯隊第一中隊を以て、突飛にも遠き蘇家屯停車場を射擊せしめたが、これは少しく御無理であつたと評者が思ふのは、樹林子の北端から蘇家屯停車場までは約三里に近い道程である、最も我に有利に計算してもまづざつと一萬米突である。此樣な遠距離では到底射彈の先方まで到達し樣筈がない、大切なる重砲彈を此樣な無益な射擊に費やしては、それといふ場合に彈藥の缺乏を來すのは目前であつて、此の先生頗ぶる頓狂なる行爲多く、昨夜は敵の離脫を目的とせる砲擊の開始を以て、味方の攻擊開始とはき間違へて大騷動をやり。その爲めに寢ぼけて居たわけでもあるまいが、今朝はまた一萬米突の途方圖もない遠距離を射擊して、重砲彈

が途中で中休みをするといふ滑稽を演じたのは、此隊長到底距離の觀測を以て生命とする砲兵、就中重砲兵の聯隊長としては不向き千萬であつて、これは矢張火藥庫位の閑地に置くが適當な人物であつたのであらふ。其他砲兵は諸方面に於て各隊の陣地を移し又は進めて、其射擊は漸次韓城堡方面に集中するに至つたのであつたが、我が爲めに左したる有利なる狀況を現出する迄の效力を奏するには至らなんだのである。

左翼隊は此日の爲めに如何なることをしたかといふと、師團命令を受けとりたる香川少將は、四日の午後五時に旅團の命令を下して、伊豆中佐の歩兵第四十五聯隊(第三大隊欠)と機關砲四門、工兵一小隊を以て、歩兵第二十三聯隊に連繫して前面の敵を驅逐して官屯方面に前進せしめ。歩兵第二十三聯隊長香渡範三郎中佐をして、其聯隊と機關砲五門、工兵一小隊を以て、富岡支隊に連繫して前面の敵を擊破して、鮑家窪子に向つて前進せしめて。更に歩兵第四十八聯隊の第三大隊と騎工兵の若干及び衞生隊半部を豫備隊として、樹林子東方に位置せしめたのであつて。五日の午前七時前後に英窩占領の報告が此の旅團に達すると同時に香川少將は、香渡中佐をして其一大隊を英窩に急速に派遣せしめた。此の香川少將の處置は急場に當り一糸亂れず極めて適當であつた。こゝで一つ研究して見たいのは旅團の豫備のことであつて、石原少將は兩聯隊から二中隊宛を取つて豫備とし、香川少將は歩兵第四十八聯隊からまとめて一大隊を取つて居るが、此場合それは何れにしても大した利害はないと思ふのであるが。たゞこゝに一つ充分に注意すべきは、香川少將が外翼にある香渡中佐から一兵も控置することなく、然して伊豆中佐の方から一大隊を取つて居るのは、蓋し師團外翼の聯隊は相當に通信連絡等に多忙であつて、側方警戒にも大に兵力を要する次第であり。如何なる不時の時機變故にも應ぜねばならぬから、そこで此の隊を完全なものにして置き。師團の中央にあるべき伊豆中佐の聯隊から一大隊を取つたのであつて、其やり方は最も至當であつて、評者は大にこれに同意するのである。此のやり方が至當

であつた爲めに、英窩が我手に入つたといふ報を聞くと同時に、此香渡中佐に命じて一大隊を咄嗟に同地に急進せしむることが出來て、我第六師團の爲めには申分なき好都合であつた。で旅團の豫備の取り方の如きは、時機の如何と其旅團の位置から考へて兩聯隊から取るも、或一聯隊から取るもよいのであるが、よく〳〵其時機を熟考して然る後に何れとも決定するがよいのであつて、此場合兩聯隊は何れも適當に其豫備隊を採つたものと評者は解釋するのである。

此日伊豆歩兵第四十八聯隊長は如何なる配備をとつたかといふと、其第七中隊を河北亂木屯の中央に置きて右翼隊と連絡せしめ、これを聯隊の最右翼として其左には、第五第七中隊を欠きたる第二大隊に機關砲二門を屬して、河北亂木屯西端の松林附近を守備せしめ。第一大隊(第四中隊欠)に機關砲二門を附して其西方に集合せしめ、第四中隊を進めて依然英窩を占領しあらしめ。第五中隊と工兵の一小隊を豫備として沙河左岸鐵道附近に置いたのであつた。

又香渡歩兵第二十三聯隊長は如何にして居つたかといふと、第一大隊に機關砲三門、工兵半小隊を屬して右翼第一線とし、第二大隊に機關砲二門、工兵半小隊を屬して左翼第一線として、此の兩大隊を併列して林盛堡北方約百米突の、昨日敵が遺棄して退却したる舊陣地に展開し、第三大隊を豫備として其後方に位置せしめて居たのであつたが。香川少將から英窩に一大隊を前進せしむべき命あると同時に第一大隊長鵜殿輝長を直ちに同地に前進せしめたのである。この鵜殿といふ男は其昔しは輝長などといふお公家樣の樣な上品な名前の持主ではなく、熊本山出しの「マッセン」黨鵜殿兵藏といふ椋鳥で、それが極めて磊落淡泊なる飲だくれであつた爲めに、友人間にはこれを兵六玉とあだなした程の隨分と厄介な人物であつたが。平時の厄介もの亂暴ものは一轉して戰時の豪傑となる場合があるもので、此男なども此の韓城堡の戰では大に功名手柄をして、其上品なる輝長公といふ名前にふさはしい勇氣を現はし、我々軍人の肩身の廣い程、其名前に一層の光輝を加へたのは天晴れであつ

た。

鵜殿少佐は前進の命に小をどりして、第二第四中隊を併列して第一線とし、其第一第三中隊を豫備として前進を起し、途中何等の妨碍を受けずして午前八時半に英窩に達して、同村の東方鐵道附近に居た伊豆聯隊の第四中隊と協力して、英窩の北端全部を占領して韓城堡の敵に對し、堅固に同村を守備するに至つたが。此時既に其左翼にありたる富岡支隊の右翼隊の一部は後達連屯附近に進出して、敵の歩兵約一大隊は官屯から高力屯方向に退却中であるといふ報告を、香川少將に呈したものがあるので機逸すべかずと考へた同少將は、猶豫することなく直ちに伊豆香渡兩聯隊に官屯と高力屯の間から、鮑家窪子に向つて前進すべく午前九時に於て命令を下して。豫備隊には英窩の南方に道をとつて其中央後を續行させ、自分は林盛堡の北端に位置を進めたが、此の旅團長の處置は概して評者は同意である。

前進の命令を受けた伊豆中佐は、先づ取敢へず第一大隊に前進を實行せしめたが、同大隊は午前九時十分沙河を越へて、鐵道に沿ふて英窩南方約千二百米突の地に進み、そこへ英窩に出て居た第四中隊を招致して大隊の全部を收結し、午前十時には鐵道線に據りて王孤家子の敵と火戰を開くの運びに至つたのであつた。既に鵜殿大隊を英窩に出したる香渡中佐は、第一線の左方部分たりし第二大隊を以て第一線とし、第三大隊を以て第二線として前進を起し、午前十時前後に第一大隊の占領しある英窩に達して、其第七第八中隊を第一大隊の左翼に增加し、他は其後方に位置したのであつて。此時富岡支隊の方を見ると其右翼隊は概ね我が第六師團左翼隊と、殆んど齊頭面に進んで來て居たのであつて。韓城堡は爲めに漸次に此の諸隊から包圍の狀況に陷るの端緒を開きつゝあつたのである。

此時此方面の敵情を如何にと見ると、彼は王孤家子から韓城堡に亘る間に據つて、我が此の陸續として前進する諸隊に對抗し。韓城堡には歩兵二大隊餘と砲兵約一中隊あり、其東北の官屯附近には砲兵約二中隊が位置して此方

面の日軍に對戰した。そこで香渡中佐は鵜殿大隊の停止しありたる英窩の村落に達して、一先づ停止し第一線の一部を其左翼に增加して敵情を探索して居つたのであつたが、引つゞき其前進を繼續せぬのを見たる香川少將は、停止することなく直ちにこれに攻擊前進をすべく促がしたが。命に接した香渡中佐は人も知る頗ぶる負けぬ氣の聯隊長であつたから、其の攻擊の督促を受けたのを非常に恥辱として、直ちに竹內方山少佐の第三大隊を、更に第一大隊の右翼に增加し、遮二無二前進をさせ樣と手段のあらん限りを盡し。それと同時に此方面を射擊するに最も都合のよい、野砲兵第四、第五、第六中隊及び戰利野砲中隊、併びに徒砲第一聯隊の第一、第二中隊、同第二聯隊の第六中隊と攻城砲とは、其全力を擧げて韓城堡に其砲火を集中して、奮つて香渡聯隊に大援助を與へたのであつたが。敵の防戰豫想以外に猛烈にして容易に英窩から前方に進出することが出來なんだのは遺憾の至りであつた。

こゝで順序上富岡支隊の行動の概略を述べることにするが、同支隊は第六

師團長の命令を受けると直に、前日の午後四時三十分命令を下して、岩元大佐の率ゆる左翼隊をして第四師團に連繫させ、江木中佐の率ゆる右翼隊をして、第四師團に連繫せしめて英窩と四方台の間の地區を經て、前面の敵を驅逐しつゝ毫匠堡子に向つて攻擊前進せしめて。その砲兵隊をして十二分に此の攻擊前進を射擊を以て援助せしめ、自から其豫備隊と共に南紅凌堡に位置したのであつたが。五日午前三時半に逸早くも第六師團の左翼隊が英窩附近の敵第一線を占領したるを聞知し、午前四時更に昨日の命令の如く運動を開始すべく部下に命令し。右翼隊は後步第五聯隊第一大隊、同第二大隊、同第三十一聯隊第一大隊の三大隊を併列して第一線とし、午前六時を以て三家子小張浪堡の陣地を出發して前達連屯に向ひ、敵の抵抗に逢ふことなく午前七時四十分に同村に達し、尋で後達連屯四方台を經て午前九時過ぎには、其第一線は韓城堡西南約千米突の線に進出して、步兵第二十三聯隊の右翼と相連なつて、鐵道線に據りて頑强に我に對戰する敵と戰を交へたのであつて。此の前

後に第一線の左翼にあつたる後歩兵第三十一聯隊の第一大隊は、一二中隊の殘敵を驅逐して午前九時半に溫盛堡を占領したので、こゝに韓城堡は西方からと南方からと包圍せられるの形勢となつたのであつた。此の際敵は大羊爾屯附近の砲約三中隊を以て四方台を、同約七中隊を以て溫盛堡を猛烈に射擊し。又鮑家窪子の敵重砲は四方台を目標として熾んに彈雨を浴せかけ、韓城堡にある二大隊以上の敵歩兵は、これも亦其火力を熾盛にして江木右翼隊の前進を妨げたのであつたから。其豫備隊の大部を第一線に加へて努力したけれども、如何にしても其前進を繼續することが出來ずして、敵前約七百米突程に停止して火戰を交へるの餘儀なきに至つたが、爲めに其殆んど中央に位置したる後歩第五聯隊の第二大隊の如きは非常な損傷を被むつたのであつた。

一體最初の富岡大佐の計畫の通りなれば、此江木右翼隊の直接左に岩元左翼隊が連繫して前進する豫定であつたのであるが。溫盛堡の西北には據るべき地物がない爲めでゞもあつたか、岩元左翼隊はずつと左方に其行進方向を

偏して、大武鎭營を午前七時二十分に出發して双台子から官立堡に進み。こゝで右翼隊が四方台から溫盛堡を目標として前進するのを知つて、其左方に出樣として東店子を目標として第四師團の右翼部隊に併進したのであつたが。餘りに其行進方向が左りにより過ぎたので、南達子營から大蘇家堡子の線に進出して仕舞い、大小格鎭堡の敵と相對戰するに至つたのであつたが。岩元大佐が此樣に矢鱈にずん〳〵左方に偏して仕舞たので、第四師團の右翼隊の一部は其進むべき位置がなくなつて、これは反對に其行進方向を右方に偏して、我が富岡支隊の兩翼隊の中間に當る所の、溫盛堡附近にわり込んで進出して來たので、此の邪魔物の爲めに富岡支隊の兩翼隊は、一時連絡を失なふに至つたのであつたが。これ實に詮じつむれば岩元大佐の不注意といはざるを得ぬのである、故如何にとなれば第六師團長の命令によりて、富岡支隊長は四方台、韓城堡を經て慈匠堡子に進むべく命令したのであるから。官立屯に一到著したる岩元大佐は、大古家子から溫盛堡の西北端を右翼として進むべき

が至當であつたのである。然るに江木右翼隊が四方台、溫盛堡に向つたからといふので、自分は勝手に其行進方向を北方なる東店子に取り、こゝで右方に旋廻すればまだ大なる方角違ひをするには至らなんだのであつたが。官立屯から東店子に向ふたる北進の方向を聊かも改めずして、南達子營から大蘇家堡に進出して仕舞たのであつて。これでは大に富岡大佐の示した區域外に脱線して仕舞て居るのみか、其左に相併進する所の第四師團左翼部隊の前進路を、無遠慮にも遮斷するといふ不都合を犯すに至つたのであつて。爲に第四師團の一部の進路がなくなり、餘儀なく其兩翼隊間には入り込まざるを得ざるに至り、こゝに部隊の混淆を生じて一時交通連絡を富岡大佐から斷絶するの失態に陷いり。左翼隊だけは第四師團と共に戰はざるを得ざるに至つたのは、これ全く岩元大佐が支隊長の示したる前進區域外に逸出した爲めであつて。若しも此の左翼隊が溫盛堡に向つて進んだならば、富岡支隊の爲めにも有利であつたのはいふまでもなく、第四師團も其前進を妨碍されることなく

して、極めて都合よく前進が出來たのであつたが。岩元大佐の前進のやり方が適當でなかつたばかりで、富岡支隊も第四師團も非常につまらぬ混雜をしたのは殘念なことであつた。

岩元大佐が此樣な不都合をしたとは知らずして、第六師團長は是非此日の中に韓城堡を攻略せんとして、第六師團の左翼隊を韓城堡の南から、富岡支隊の右翼隊を同村の西から、同支隊の左翼隊即ち岩元大佐を西北から同村に迫らしめんとして、五日午後四時三十分に命令を下したのであつたが。現に南達子營から北に向つて小格鎭堡の敵と對戰して居る岩元左翼隊は、到底韓城堡の西北に向ふことが不可能であるのみか、此場合交通が例の第四師團の混入て斷絶して居たのであるから、其命令をするも手にすることが出來なんだのである。若しも岩元大佐にして此時豫定の如く溫盛堡附近にあつたならば、此の五日の夕方に韓城堡を南西北の三方から包圍して、成否は保證の限りでないが一攻擊やつて見ることが出來たのであつたが、それを決行すること

とが出來ずして、大久保中將をして空しく其攻擊を明日まで延期せざるを得ざるに至らしめたのは。これ實に富岡支隊左翼隊長なる岩元貞英大佐の、無方針に其行進方向を左偏せしめたより來れる結果であつて、其過失は全然岩元大佐の不注意が責を負はねばならぬのであつた。此樣に富岡支隊の方に手違ひがあつた爲に、南方から韓城堡に廻る筈であつた伊豆中佐の步兵第四十八聯隊は、進んで王孤家子西南方約六百米突の敵の交通壕を奪取し。こゝに其全力なる二大隊を散開してこれを占領したけれども、王孤家子官屯韓城堡の三面よりの步砲の集中火を受けて、非常の苦戰に陷り停止して時機を待たざるを得ざるの狀況になつて仕舞たのであつた。

翌六日に於ても第六師團長は依然前日の意思を飜さずして、吳家屯鮑家窪子の線に是非とも進出せんとして、左の如き部署を五日午後十時四十分に於て命令したのであつた。

一、石原少將の右翼隊は左翼隊の王孤家子附近に進出するを待ち于家窪子北方の地區より沙河堡を攻擊す

二、香川少將の左翼隊は富岡支隊と連なり河北亂木屯より英窩に亘る地區より官屯方向に向つて攻擊前進す

三、富岡大佐の支隊は明拂曉を以て韓城堡を奪略し同地附近に集合す

四、砲兵隊は逐次陣地を進めて諸隊の攻擊及び追擊に充分の援助を與ふ

大略前述の如き計畫を以て翌拂曉と共に戰鬪を開いて見たのであつたが、敵の陣地堅固なる上に其防戰が頗ぶる頑强であつて、到底一步も敵に向つて前進するの機會を得ずして、此六日は終日殆んど現狀を維持するの餘儀なきに至つたのであつた。

第六師團長は數日來非常に勇戰したに係はらず、聊かも前面の敵に對して其意圖を遂行するの好機に會せざる而已か、昨六日の如きは富岡支隊の左翼隊と第四師團右翼隊の交錯を生じたる爲めに、全然現狀維持の外に何等の施すべき手段なきに至つたのを、頗ぶる遺憾千萬なりとしたのであつたが。敵

は北達子營から其北方附近に大兵力を有するものゝ如く、これを用ひて我第四軍の左翼に向つて脅威を企だてんとする樣な模樣があるので、斯くては軍の死活問題を提起するの大危險が生ずると考へて。如何なる損害如何なる苦艱をも顧みずして、速に韓城堡を拔き以て北進の動機を作らんとして苦心慘怛軍議を凝らしたる結果。左の要旨を含める韓城堡攻擊の命令を、六日午後六時三十分に各隊に下して直ちに其準備に著手せめたのである。

一、石原少將ハ步兵第十三聯隊(第三大隊欠)、同第四十五聯隊第一大隊、騎兵半小隊、機關砲九門、工兵一中隊並ニ大久保支隊ノ左翼隊ヲ以テ依然于家窪子北方地區ニ據リ左翼部隊ノ王孤家子ニ進出スルヲ待チ沙河堡、小孤家子ニ向ッテ攻擊前進ニ移ルベシ

二、伊豆中佐ハ步兵第四十八聯隊(第三大隊欠)、同第十三聯隊第三大隊、機關砲二門、工兵一小隊ヲ以テ河北亂木屯北方地區ヲ固守シ射擊ヲ以テ前面ノ敵ヲ牽制スベシ

三、香川少將ハ步兵第二十四旅團(第四十八聯隊本部及第一、第二大隊欠)、同第四十五聯隊(第一大隊欠)、後步第八旅團(第十七聯隊第三、第四中隊及第二大隊欠)、同第四十聯隊第八中隊、騎兵半小隊、徒砲第二聯隊第二大隊、第五、第六中隊欠)、機關砲十二門、工兵第二、第三中隊(各一小隊欠)ヲ指揮シ明拂曉ヨリ韓城堡及其附近ノ敵兵ヲ攻擊スベシ

四、原砲兵大佐ハ野砲第六聯隊、同第十四聯隊第一大隊、戰利野砲中隊、工兵一小隊ヲ以テ御影池砲兵大佐ハ徒砲第一聯隊第一、第二中隊、同第四聯隊第二第三中隊欠)、攻城砲二門ヲ以テ各現在ノ陣地ニ在リテ師團ノ攻擊ヲ援助スベシ

五、岩元大佐ハ步兵第十七聯隊(第一、第二中隊欠)ヲ以テ依然南達子營附近ヲ守備シ第四師團ノ部隊ト協力スベシ

六、後步第二十聯隊第八中隊同第四十聯隊(第四、第八中隊欠)、騎兵一中隊(一小隊欠)ハ豫備隊トナリ午前六時八家子ニ集合シ電燈班半部ハ依然後台ニ位

置スベシ

數日來の苦戰の結果大分に建制は破壞されて混淆して居るけれども、此の場合此の部署は先づ概して適當といふの外はない樣である。此の師團命令を受けたる石原少將は六日夜八時三十分に於て命令を下して、大久保支隊の左翼隊即ち後步第六聯隊、機關砲二門、工兵一小隊、步兵第四十五聯隊第一大隊、機關砲四門及び步兵第十三聯隊(第二、第四中隊及第三大隊欠)を以て第一線として、佟孤家子北方から小孤家子南方沙河々岸に至る間を堅固に守備せしめ。步兵第十三聯隊第三第四中隊、騎兵半小隊、工兵一中隊を于家窪子に置いて豫備隊とすべく部署を定め。又伊豆中佐は步兵第十三聯隊第三大隊を河北亂木屯北方に同第四十八聯隊第二大隊、同第一大隊(第三中隊欠)を依然其左翼に併列せしめて第一線とし。步兵第四十八聯隊第三中隊、機關砲二門、工兵一小隊を、豫備として河北亂木屯に置くべく部署をしたのであつたが。翌七日の朝までは概して平穩にして左したる目立ちたる戰もなかつたのであつた。

香川少將は如何に攻擊部署をしたかといふと、數日來の戰鬪に於て知り得たる所の敵の防備稍〻不完全にして、其上に障碍物を有せざる韓城堡の西端に向つて拂曉强襲を決行するの決心を定めて。六日夜九時師團の攻擊命令を受領したる後、同夜十一時東林盛堡に於て命令を下して左の部署をしたのであつた。

一、香渡中佐は步兵第二十三聯隊(第二大隊欠、機關砲五門、工兵一小隊を以て右翼隊となり英窩北方より韓城堡南端に向つて助攻し機を見て敵陣を奪略す

二、富岡大佐は後步第八旅團(第十七聯隊本部及第三、第四中隊、第二大隊欠)同第四十聯隊第八中隊、徒砲第二聯隊第二大隊(第五、第六中隊欠)、機關砲二門、工兵一小隊を以て中央隊となり右翼隊の左に連なり韓城堡北方を流るゝ細流迄の間に展開し韓城堡西端に向つて攻擊す

三、太田中佐は步兵第二十三聯隊第二大隊、同第四十五聯隊第三大隊、同第四

十八聯隊第三大隊、機關砲五門、工兵一小隊を以て中央隊の左より溫盛堡に至る間に展開し韓城堡北方鐵道線路に據れる敵を攻撃す

四、豫備隊たる歩兵第四十五聯隊第二大隊、騎兵半小隊、工兵一小隊は午前四時より大古家子に位置す

此の部署をなしたる香川少將は明早朝より豫備隊の位置たる大古家子に居ることに命令したのであつたが、此の部署の中で頗ぶる人の眼につくものは太田中佐が全然其建制を異にしたる三個の大隊を率ゐて、即ち混合聯隊を以て攻撃をなすの奇現象を見るに至つたことである。前數日の苦戰惡鬪の結果は、此樣な變化を來す原因をなしたのであるから、これは實に已むを得なんだのであつて、決して此場合これを甚だ無理なやり方とは思はぬのであるが。斯の如き窮策を弄せざるを得ざるに至つたのは、要するにこれ迄に於て適當に其兵力の應援派遣をやらなんだ因果の應報と見るべきものであつて、如何にこの混合聯隊を使用すべく其責に當つた太田中佐の、これが指揮に大困難

を覺へたかはいふ迄もないことであつて。六日一日何事をもなさず現狀を維持したる戰況にありたる第六師團と富岡支隊が、七日に攻撃を決行する爲めには今少し隊伍を整頓したる上に、今少し完全なる準備が出來さうなものであつたと、此間の實況を見たのでない評者などには、何となく不可思議に思ふの感を禁じ得ぬのである。が多分これは萬々已むを得なんだのであつたらふ、若しも萬々已むを得ざるにあらずして此樣なことをしたとしたならば、それは確かに香川少將が、全く大過失を犯したものとして、鼓を鳴らしてこれを攻撃するが至當であると評者は信ずる。

英窩附近に前日來位置したる歩兵第二十三聯隊長香渡範三郎中佐は、如何にもして此の韓城堡を速に奪略せんと苦心して、終に現狀維持に終つたる六日に於て百方手段を盡して敵情地形を偵察せしめたのであつたが。其中で第八中隊の少尉中山正文に下士一卒二を附して派遣したる將校斥候は、從卒米九一等卒の外は斥候長中山少尉以下悉く死傷したのであつたが。勇敢忠實な

る米丸從卒が重傷を負へる主人の中山少尉に應急の救急手當を施こして、敵彈雨注の間を冒し萬死に一生を得て歸還して、香渡中佐に呈出したる報告は實に我全軍の爲めに非常に有益なるものであつて。此一報告によつて韓城堡の攻擊は始めて一道の光明を見るを得たのであつた。此日中山少尉は頗ぶる大膽千萬なる行動に出でゝ、晝間進んで韓城堡南方鐵道線路上に設けたる角面堡に接近し、充分にこれを偵察したる後心に得る所あつて歸還せんとする一刹那。忽ち敵の發見する所となつて非常なる近距離の猛射を浴びせられ、一行四人中三人まで死傷して同少尉も全く歩行の自由を失なふに至つたのであつたが。此の千萬金にも換へ難き偵察の結果を報告させぬ中に、中山少尉を死なして仕舞ては全軍の一大事とそこに能くも氣のついたる唯一人の健全なりし米丸一等卒は、敵の彈丸霰飛の間を非常な苦心をして同少尉を蟻のものを引く如くにそろ〳〵と運搬して、稍〻安全なる所に於てそれに繃帶を施こして應急の療法を加へたる後、數時間の長き間堅忍其困難極まる行動を續行

して、同少尉を香渡聯隊長の前まで滿足につれて來たのは實に天晴れなる從卒の振舞であつた。

そこで中山少尉は傷苦を物ともせず、詳細に實見したる地形と敵情とを報告して、韓城堡南方角面堡の西南約百米突に凹地があつて、そこには入れば彼我の彈丸を避け得る而已か、敵の角面堡に向つて突擊を決行するには適好唯一の準備陣地であつて、其廣さは一大隊を入れるに充分であるからこゝに足だまりをこしらへて角面堡に突擊したならば、萬々失敗をすることはないといふ味方に有利無双の報告をなしたので、香渡中佐の喜びは實に譬へるにものがない。直ちに此夜午前一時に於て例の鵜殿輝長少佐に第一大隊(第一中隊欠)と機關砲二門、工兵半小隊を屬して、此の凹地内に潛かに進入せしめたのであつた。餘事であるが此の中山正文といふ少尉は武骨一遍なる隼人武士であつて、自分が若い時分小倉に居た時代にはたしか聯隊書記の軍曹であつたと思ふが。其後現役滿期となつて此戰役に召集されて少尉に任官した人で、

彼れは此の勳功によりて軍司令官より感狀を賜はり、戰後功四級の榮章を佩ぶるに至つたが。前述の如き無双の勇士である上に非常な精神家であつて、永らく東京築地の立教中學の講師として令名あり、終に同大學から褒賞的に米國に派遣されたことまでは承知して居るが、多分今でも何れかにあつて社會の爲めに有益なる貢献をなしつゝある事であらふと評者は信ずる。

第一大隊を中山少尉の發見して來た凹地へ潛かに進めると同時に、竹内方山少佐の第三大隊(第十二中隊欠)を、英窩の東北端より鐵道線に沿ふて展開し、韓城堡の南方にあつて我が前進を妨碍する敵に對せしめて、其殘餘の第一、第十二中隊、機關砲三門、工兵半小隊を英窩の村内に控置して豫備とした。此の香渡中佐の部署は頗ぶる適當である、就中中山少尉の偵察によつて知り得たる凹地に、鵜殿大隊を前進せしめてこゝに攻擊の準備を整へ、機を見て韓城堡南方角面堡へ突入するの楷段としたのは、實に極めて適當であつてこれありしが爲め此日韓城堡を陷落せしめ得たのである。其偵察の功は中山少尉にあるけれども、これを發見する爲めに將校斥候を派遣したのは聯隊長であつて、其發見の報告を得てこゝに一大隊を派遣したのも聯隊長である。果して然らば此の韓城堡占領の第一著手をなしたる功は、實に此の香渡中佐の此の部署の適當なりしに依るといふても決して溢美ではあるまい。

富岡大佐は其中央隊を如何に部署したであらふか、彼は師團命令と香川少將の命令とを受領して、七日午前二時に至つて始めて命令を下して、從來江木中佐の率ゐて居た第一線の諸部隊を、韓城堡北方に通ずる細流の線より以南に移し、これを以て韓城堡の西方面からの攻擊に任じ。長浪堡に置いてあつた徒砲第二聯隊の第七中隊の二門を、近く四方台に招致して戰鬪に參與せしめて攻擊を容易にし。第一第二第八中隊の欠けて居る後步第三十一聯隊を以て豫備隊として、自分もそれと共に四方台に位置を占めることにしたのであつて。これと同時に今まで富岡支隊に屬して居た第四師團の諸隊を、工兵小隊を除くの外悉く原隊へ歸還せしめたのであつた。此の部署に付ても評者

は概して同意である。

英窩に於て香渡中佐の聯隊と連繫し、左翼韓城堡北方を流るゝ細流までの間を占領して、敵の備へ薄き同村西方面から攻撃せんと構まへたる江木中佐は。先づ後歩第三十一聯隊第八中隊に、機關砲二門と工兵一小隊を附して前遣し、これに韓城堡西南端の鐵條網破壞の大任を負はしたのであつたが。此鐵條網の破壞作業の命令も評者は適當であつたと信ずる。而して其戰線に如何に其隊を部署したかといふと、後歩第五聯隊の第一大隊を右翼に置いて香渡中佐の第三大隊と英窩に於て連繫を保ち。其左に同聯隊の第二大隊と後歩第四十聯隊の第八中隊とを併列し、左翼隊の鐵道に達するを待ちて攻撃に移らしめ。自から後歩第十七聯隊第一第二中隊、同第三十一聯隊第一第二中隊を率ゐ、第一線の右翼後にあつて豫備隊とした。この部署も別に意見はないが此場合江木中佐は、其第一線の指揮を第二大隊長栃内萬吉少佐に命じた樣であるが、自分はそれには同意し難いのであつて。各隊が混淆しては居るけれ

ども其兵力は一聯隊足らずの少兵力であるから、別に第一線に指揮官を設けずとも江木中佐自身で第一線を指揮するに困難はない筈である。それに第一線二大隊の指揮を栃内少佐に一任して、自分は一大隊弱の兵を握つて後方に控へて居たのは適當でない。建制を同じくする隊内でも兎角權限問題等が起り易いのに、斯く混成になつた各隊を一大隊長に指揮さしては、到底これを圓滿に巧妙に使用することは出來ぬ。からしてこれは江木中佐が自から指揮するがよいのであつて、斯くなければ第一線が一致協同の戰鬪動作を巧に決行することは難儀であらふ。

四方台に招致した殘りの徒砲第二聯隊の第七中隊は、依然長浪堡の舊陣地にありて敵に對し、同第八中隊は萬家園子附近に在つて砲撃の準備を整へて天明を待ちつゝあつた。斯くして右翼隊中央隊は左翼隊の進出を今か〳〵と待つて居たが、容易に進出して來さうな模樣がない。然るに光陰は少しも猶豫がないものであるから東天將に白からんとするに至つたので、徒らに左翼

隊を待つ爲に拂曉攻擊の好機を逸しては一大事であると考へて、右翼中央の兩隊は相協力して午前六時より攻擊準備の射擊を開いたのであつた。こゝに於て河北亂木屯の野砲第六聯隊の第二大隊、林盛堡東北の戰利野砲中隊は何れも砲火を開いて、高力屯附近にある敵砲兵を猛烈に制壓し、天明と共に此方面の戰聲頗ぶる勇壯を極めたのであつた。

先に韓城堡西南端の鐵條網破壞に向ふたる後歩第三十一聯隊の第八中隊は、工兵一小隊、機關砲二門と協力して、非常に困難を凌ぎ敵火を冒し辛苦艱難して、必死になつて破壞作業を進めて居ると。まだ其作業が半ばにも達せない中に、後方にある味方の歩兵が何の沙汰もなく全線一時に射擊を開いたのであるから、其危險は實に名狀すべきものがない。驚ろきもし怒りもしたる破壞隊は、こゝに一先づ其破壞を中止して午前六時半頃、急遽韓城堡南方堡壘の西南の凹地に逃げ込んで、こゝに漸く味方と敵の彈丸を避けて一先づほつと一息したのであるが。江木中佐は此の破壞班を先遣して置きながら、これに一言の

警告をも與へずして歩兵射擊を開くといふのは實に亂暴である無法である。幸にして例の鵜殿大隊の潛伏して居た凹地があつたから、此の後歩第三十一聯隊の第八中隊以下の諸中隊は、僅かに無事なるを得たけれども若しもこれがなかつたとしたならば、此大危險を冒して味方の爲めに進路を開かんとした、勇敢無双なる此の破壞班は敵と味方の兩方からの夾擊的の猛射の爲めに、全く殲滅の悲運に遭遇したに相違ない。これ蓋し前にもいふた通り江木中佐が自から第一線を指揮せずして、栃内少佐に其指揮を一任した爲めに其破壞班の前に出て居ることをつい一寸と忘却して此樣な始末に及んだものらしく、斯くの如き失態を釀すに至つたのもつまりは江木中佐の處置、其宜しきを得なんだに歸するの外はないのである。此樣な目にあつたものであるから此破壞班は大に腹をたてたといふわけでもあるまいが、全く江木中佐の指揮を脫して此凹地内に前から居た鵜殿少佐の大隊に合して、其指揮の下に戰鬪するといふことになつて仕舞たのである。

例の混合的聯隊長たる太田中佐は如何にといふに、此日午前二時三十分に林盛堡の北端に集合して、歩兵第二十三聯隊第二大隊と同第四十八聯隊の第三大隊とを併列して、各大隊に工兵半小隊宛を加へてこれを第一線とし、歩兵第四十五聯隊第三大隊と機關砲二門を豫備隊として、四方台附近を經て溫盛堡に向つて進んだのであつたが。何分にも暗夜のことではあり地形は極めて未熟てあるので、其運動が稍〻遲延して目的地に達したのは彼れこれ午前六時半前後であつたが。太田中佐は少しも猶豫することなく直ちに歩兵第八聯隊第三大隊に代つて、中央隊の左方より溫盛堡の間に展開して、同時に下番の歩兵第八聯隊の大隊から機關砲三門の轉屬を受けたのであつたが。此太田中佐の左翼隊の展開を畢つた頃には、最早夜が全く明けはなれて居たので、拂曉に其運動を祕して敵に近接するといふ利益を失なつたが。きかぬ氣の太田中佐は少しもそれに頓著せずして、勇ましく第一線を敵に向つて前進せしめて、敵火の猛烈なるを冒して一時韓城堡北方鐵道線に據れる敵の前方七百

米突まで進んだが多數の守兵の頑强なる歩兵火戰と、蘇家屯附近にありし敵砲約二中隊の眞側面からの縱射には、流石の太田中佐も實は頗ぶる閉口して午前七時頃には進出して折角占領したる前線を棄てゝ、午前八時には歩兵第四十八聯隊第三大隊の左翼から、逐次溫盛堡の村端に其兵を退却せしめて其損害を少なくするの方法を講じたのは、殘念ではあつたが實は萬已むを得なんだのであつて。これ蓋し前にもいふた通り一番遠方に派遣されて、一番困難なる任務に當るべき此隊を三個大隊とも其建制を異にした樣な寄せ集めの大隊を以て構成したので。集合にも命令傳達にも前進にも警戒にも、何にも彼にも時間を徒費して、時機を遲らした爲めに終に拂曉の攻擊に間に合はず、中央右翼兩隊はそれを待たずして、各個各別に攻擊を開始するといふ手違ひを生じ。終には此の太田中佐の第一線も、一度進んで占領したる線を棄てゝ溫盛堡に退却するの餘儀なきに至つたのであつて。數日來繼續したる大苦戰中のことであるから、これも實に已むを得なんだのではあらふが、香川少將

の此の左翼隊のこしらへ方には評者は全然同意せぬのである。

斯くの如く多少の不結果はあつたけれども、數日來の熱心なる計畫が漸次に熟して來た爲めに、敵の唯一の賴みとせる、西伯利第六軍團と第十七軍團の接際に近くして、且つずつと我軍の方へ突出して居る敵の大要害たる韓城堡は、南方及び西方より略ゞ包圍の形勢になるの餘儀なきに至つたのであつて。即ち南方英窩には香渡中佐の二大隊あり、就中其鵜殿大隊は南方角面堡に近接して突擊を準備しあり。西南方には江木中佐の後歩第五聯隊の二大隊と後歩第十七、第三十一、第四十の各一中隊が之に對し。西方から西北にかけては太田中佐の混成聯隊が迫つて居たのであるから、殆んど西南二面から包圍せられるといふ有樣になつたのであつたが。我が歩兵が此の樣に著々として近迫すると共に我が輕重の全砲兵は殆んど其砲火を唯一つなる、此の韓城堡村落と其南方の角面堡に指向したのであるから、此の附近を守備したる敵は非常なる苦戰に陷つて。爆煙の爲めに眼も口もあいては居られず、飛散する砂塵

の爲めに銃の遊底は開閉の自由を失なつたと敵の戰史に明記してある所を見ると我が此の砲擊は敵に頗ぶる甚大なる苦痛を與へたものであつた。

鵜殿輝長少佐は夜半より韓城堡南方角面堡の南方凹地にあつて、天幸にも敵が同地に委棄して置いたる、重砲臺用の掩蓋や砲床があつたのを利用して、其直前の角面堡へ突入する時の、障碍物超越用の急造踏板を必死になつて作製して、我が砲兵の威力の發揚を待つて居たのであつたが。午前九時頃から我諸砲兵就中攻城砲の韓城堡及び其南方堡壘に對する射擊の猛烈さに、流石の敵もこらへ切れなくなつて來て午前十時三十分頃、其砲擊の强度の絶頂に達すると共に敵兵は動搖の色を現はして來たのであつたが。油斷なく敵情に注意して突擊の時機を待つて居た鵜殿少佐は時機將に至らんとするを知つて、偶然の出來事からこゝに來加して居たる彼の後歩第三十一の第八中隊と機關砲二門に、射擊を以て突擊を掩護することを命じて。自己大隊の三中隊を第四第三第二中隊の順序に、半小隊面の縱隊に集合せしめてこれを突擊隊とし、

先づ工兵半小隊を前遣して鐵條網超越の設備をなさしめたが。此の工兵の前進を見たる敵は既に動搖を現はしながらも、此の破壞作業を妨碍せんとして東の方から前進を始めた部隊があつた。英窩に居て戰況に眼をはなさなんだ香渡中佐は敏くもこれを發見して、最後の豫備として手中に握つた歩兵第二十三聯隊第十二中隊を、英窩に據れる第三大隊に增加して其勢に乘じて、射擊と手榴彈を以て此の東方から妨碍に出かけた敵兵を逆襲して、終にこれを擊退して仕舞たのであつたが。この間に於て工兵半小隊の作業班は、必死の努力を以て十時四十分前後に敵堡壘に達する一條の攻擊路を開設し得た。今まで英氣を蓄はへて待ちに待つたる鵜殿少佐は、時來れりと大聲味方を激勵しつゝ雄々しくも直ちに突擊に移り、自から陣頭に立つて大刀を打ち揮りく勇戰の範例を示しつゝ、敵の堅固なる角面堡内に突入して筆にも舌にも盡し難き、壯烈無双なる大接戰を決行し、彼我の死傷に角面堡を埋め盡す程なる肉彈的の大勇鬪を經たる後、始めて午前十一時を以て韓城堡南方角面堡

は鵜殿少佐の大隊の占領する所となつたのである。

此の要害の危急に瀕せる有樣を見て敵は韓城堡の村落から、角面堡增援の爲めに二中隊程の歩兵を急進せしめたが、潰走しつゝ敗北する敵兵の爲めに誘なはれて其效なく、全く混亂して村落内へ退却するに至つたのであつた。右翼隊の一部の此の成效に勢を得たる中央隊と右翼隊の殘部は、勇氣一時に百倍して猛然起つて敵に尾して韓城堡内に突入したので。如何に頑强なる敵兵も此の勢には敵しかねて、大羊爾屯方向に全潰走を以て敗北し、こゝに韓城堡は我が香川少將の指揮せる攻擊隊の爲めに、午前十一時三十分全く第六師團長の希望の如く味方の手に入つたのであつた。

敵の第十七軍團は其左翼に於て最も重要なる據點を失なつたので、非常に狼狽して幾度かこれが奪還を計畫したけれども、我占領各隊が機敏にも直ちに其陣地に機關砲をすへ付けて、頑强にこれを射擊した爲めに何れの逆襲も其効を奏する能はなんだのであつた。こゝに於てか露の第三軍は其中央の大

切なる突出部を我が第六師團に奪はれて、到底永く此陣地を維持する能はずと覺悟した折も折。乃木第三軍の大繞回に其側背を壓迫せられたる露の第二軍の失敗の爲めに、黑鳩公總司令官の退却命令が下つたので、沙河の陣地を非常に剛性に頑守したる露軍も、此七日の夜に於て渾河の線に悉皆退却して仕舞たのであつて。露軍をして到底此線の持續し得ざることを覺悟せしめたのは、此の韓城堡の陷落したのが確かに大にあづかつて力があつたのであつて。其大功を奏し得たる根本は何であるかといふと、香渡範三郎中佐の將校斥候派遣と、其斥候長たる中山正文少尉が萬死を冒して詳細なる敵情地形の偵察をなし、又其從卒の米丸一等卒が重傷の少尉を運搬して、機を逸せず其重要の報告を聯隊長に呈しさしたのが抑々の原因であつて。香渡中佐は直に其偵知し得たる敵の舊攻城砲臺のありし凹地に、鵜殿輝長少佐の大隊を派遣して潛行時機を待つて韓城堡南方角面堡に突擊をなさしめ。此の困難なる命令を得て喜色滿面踴躍して前進したる、我が友鵜殿兵六玉の大猛者は、油斷なく此の凹地に於て突擊準備をして其時機の到來を待ち。朝來非常に猛烈なる砲火を以て敵を苦しめたる我諸砲兵は、此日午前九時頃より一層其火力の集中を韓城堡附近に向つて濃密にして。敵が計算した所によると一時二十分間に、鐵道角面堡に落下したる二十一乃至二十八珊知榴彈三十二發、又同時間內に韓城堡附近に落下したる各種砲彈百十一發の多きに至つたといふ程に猛射したので。敵の動搖するのを見て取り直ちにこれに突入し、此の角面堡を守つたる三個中隊の露兵は其兵力の百分の五十二を失なつて潰走し、鵜殿大隊は最先に一番乘りをしてこれを占領して、始めて第六師團の韓城堡占領の途を開いたのであつて。香川少將の此の日の攻擊のやり方も適當であつたらふが、就中此の香渡中佐及び鵜殿少佐の大功績といふものは、實に千秋戰史の上に特筆大書すべきものであると評者は思ふ。

然るに如何なる理由であつたか其委細の事情は知らぬが――否知つて居ても申さぬが、休戰となつた明治三十八年の歲暮に近く昌圖附近に滯陣したる

同旅團は、勳功調査の爲めに兩聯隊長を集めて會議を開き、其席上で此の香渡中佐と香川少將とは大衝突を起し。非常に其旅團長の所爲を不當としたる同中佐は、時もあらふに明治三十九年の一月一日其宿舍に於て割腹して自殺を遂ぐるに至つた。これ蓋し激し易き率直なる香渡中佐と、意地惡るにして皮肉なる傾向を有する香川少將とが、其性質の相反撥したのが原因であらふけれども。要するに香川少將がこれ等歩兵第二十三聯隊の勇戰に對して、充分の論功行賞を敢てするに吝なりしが爲めに、憤激の餘りに自刄して其部下に謝するに至つたのであつて。中山少尉だけは殊勳の甲として行賞せられたけれども、香渡中佐はもとより鵜殿少佐もさして他よりもすぐれたる行賞を得るに至らなんだ。今更ら此樣な內情をいひ立てるのは面白くないことであつて、何れに其曲があつたかは門外漢の評者などには知ることを得ぬけれども。此の自刄したる香渡中佐の葬式の日は、風雪滿洲の野に滿ちて物すごき程の天候であつたが、當の旅團長香川少將は其葬儀に列せなんだのである。

自分は訃報を得て遠くこの聯隊本部を訪問して、親切なりし我が先輩の凱旋を眼前にひかへたる芽出度き此の元日に於て、突然自刄と決心したる原因が容易なる些細な衝突でなかつたことを知ると共に、其旅團長香川少將の處置の頗ぶる冷淡なるに驚かざるを得なんだのである。彼は冷淡にして此の香渡中佐の葬に會せなんだか、はた中心其死に對して心苦しきことがあつた爲めに、良心が其葬儀に列するを許さなんだか。何れにしても此の戰場に於ける同情に堪へざる變死に對して、旅團長の冷々淡々たる態度には評者はいはん方なく驚愕させられたのであつた。

よしや其曲直は何れにありとも、部下聯隊長の潔きよき自刄に對して聊かも同情を表せぬ樣な旅團長は、自分は我が大日本の軍隊には將來に於て其跡を絕たんことを切望する。一死は萬債を償ふとさへもいふて居る、萬々一多少のよくないことが香渡中佐にあつたとしても、其死に對しては充分これに敬意を表して然るべきではあるまいか。況んや自分は先輩として此の兩人の

性質を何れも熟知して居るが、一は淡泊にして正直、一は意地わるにして皮肉、評者は如何にしても香川少將のやり方が至極御尤であるといふことを得ぬのである。如何に强よくても如何に傑らくても、上下の一致を缺く樣なことでは最後の勝利を收むることは出來ぬ、青年將校諸氏切に此の上下の協同一致といふことに就て、充分深く修養を積まれて此樣な不祥事の陛下の軍隊内に再び發生せぬ樣に、日々に其身を三省せられんことを、餘計なことながら序を以て御願をする次第である。

例によりて露軍に就て少しく研究して見るが、黑鳩公將軍は第一第三軍を以て日軍を沙河の陣地に於て喰ひ止めて、其右側背へ迫つて來た乃木軍の方へ第二軍に總豫備隊のあらん限りを加へて攻勢に轉ぜんとして居たのであつたが。それがいつも思ふた樣にゆかぬ中に、第三軍の鎖鑰として賴み切つた る突出部の韓城堡が陷落したので、こゝに全く沙河陣地の維持し得べからざるを知つて。第一第三軍に强力なる後衞を殘して、渾河の線まで退却すべき

を命令して、其實行を此の七日の夜に於て決行すべく師團長まで内命したが。韓城堡の陷落の爲めに志氣を非常に沮喪せしめたる、セリワノフ第十七軍團長は夜に入ると共にこつそりと退却して仕舞て。其隣りの西伯利第六軍團長リボレフ大將が、まだ此陣地を頑守せんとしたる勇ましき決心をも、其右側が全然開放せられて仕舞た爲めに實行する能はなんだ程に、露軍は此の韓城堡の陷落に上下一同いたく力を落して仕舞つて、昨冬以來非常な力を盡して構成したる沙河の陣地を棄てゝ、遠く渾河の線まで退却するに至つたのであつて。此の退却こそは實に露の全滿洲軍の潰走の起因をなしたのは事實であるから、此の一韓城堡の占領が此の露軍の潰走を誘起したともいふ事が出來るのである。が併し此の樣に露軍に失望落膽させた程な大切な韓城堡を占領したる第六師團も、それと同一命令系統内にある第四軍全體も、此の七日の夜に於て敵が退却し樣とは毛頭思はずして、此の七日の夜半過ぎに及んで始めて敵の陣地が空虛であるのを知つて、吃驚仰天したなどは實に餘りに見つ

ともよくない、失態で如何に日軍が此の會戰で疲勞しきつて居たかはこれでも知れ樣。評者は此夜午前二時過ぎ第四軍の參謀から敵兵退却の電話通報に接し電話を以て祝辭を述べると唯一言

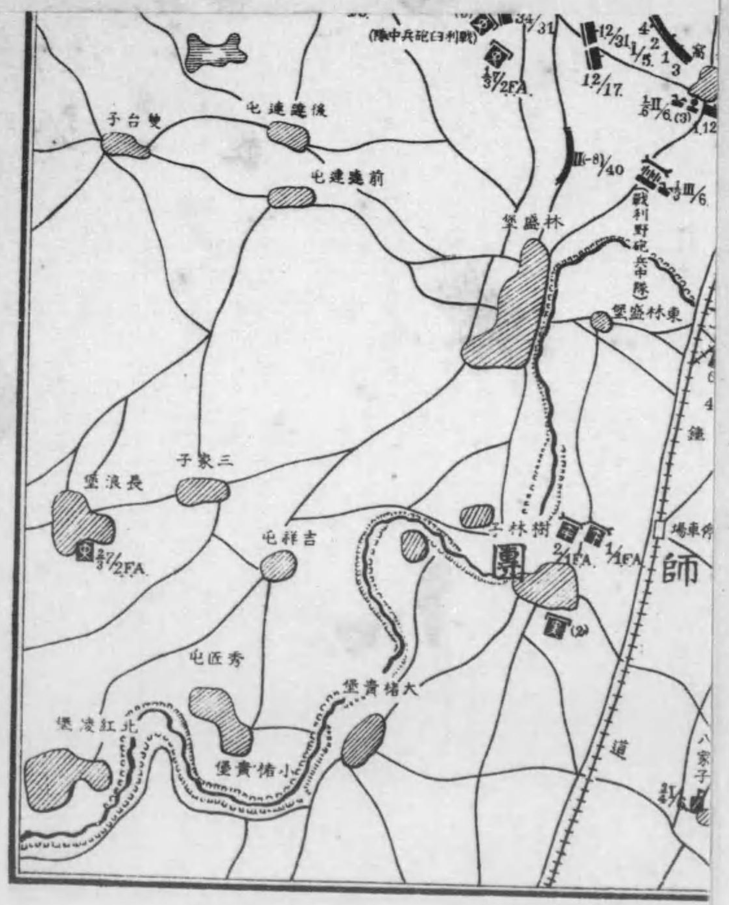
『面目しだいもありません』

と答へた而已で忽ち電話を切つて仕舞はれたが、確かに此の退却に一杯すかを喰はされた第四軍の心情は、此の參謀の一言に於て立派に盡くされて居ると評者は思ふのである。此際の敵の退却は極めて祕密に極めて巧妙に行なはれたが、就中西伯利第六軍團が退却するに當つて韓城堡の破綻の爲めに、沙河堡附近に居た同軍團の右翼隊は全く日軍に迂回されて仕舞たので。已むを得ずしてこれを最後に殘して左翼部隊から先に退却させ、此の右翼隊を以て右側衞として一番後に退却せしめたのであつたが。これ即ち步兵操典第二部第八十一に

『戰場ヲ離脫スル爲ニハ敵ノ攻擊最モ激烈ナル所ニ於テ最モ永ク抗拒スルヲ

原則トス(下略)』

とある條文に遵ふたものであつて、此のリボレフ大將は前には沙河陣地を固守するの意見具申を出し、今は又危急の退却に當つて此の極めて合理的なる退却法の指揮をなす等、實に敵中に於ては頗ぶる稀に見るの好將軍であつたと評者は感服に堪へぬのである。



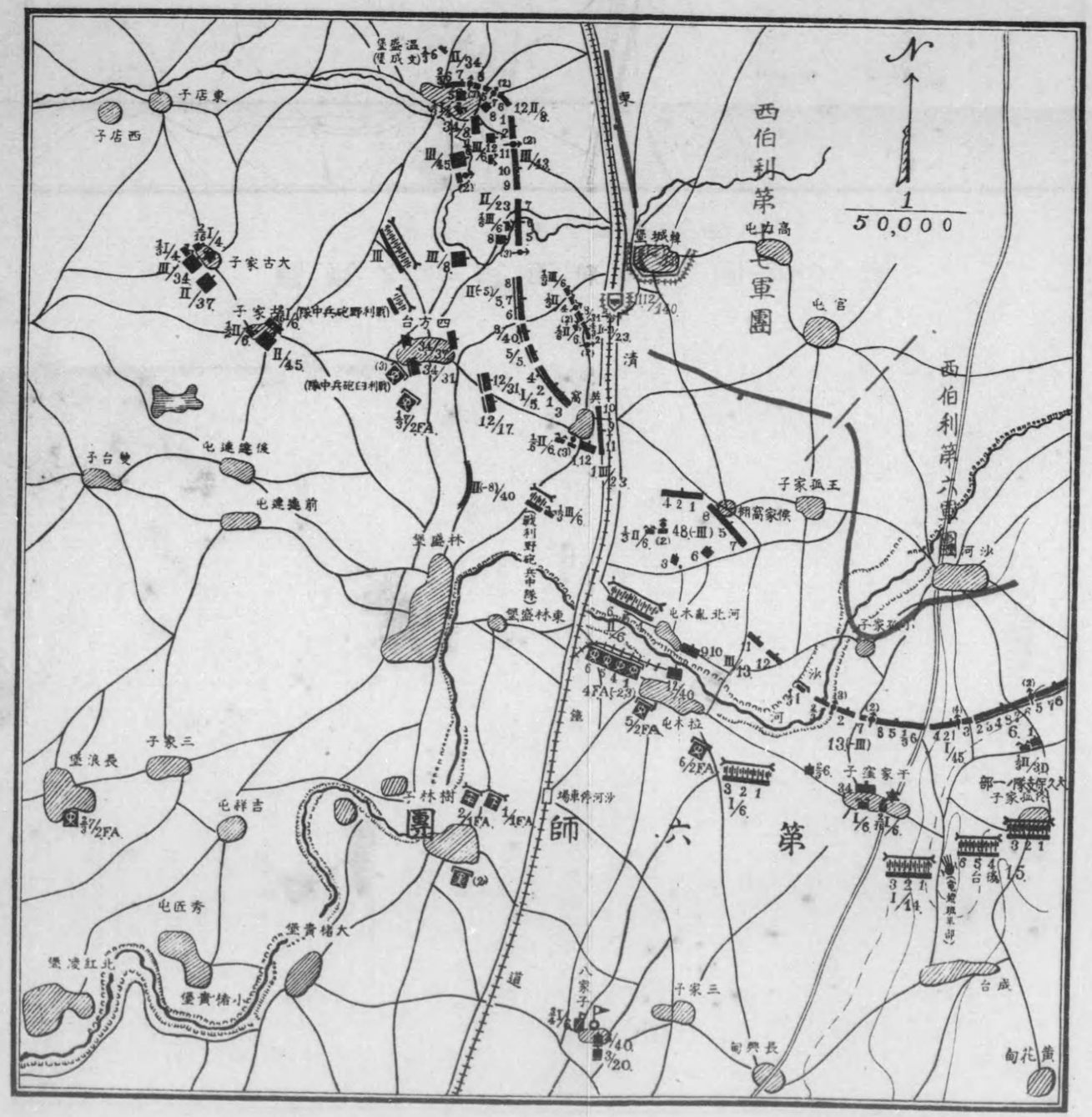
初冬夜坐賦示同學某將軍

成仁未定稿

宿志老來猶未弛。　夜風遮莫吟窓紙。
呵筆燈前評戰史。　研朱爐畔點兵書。
故人休咎方忘。　妙運用唯存一心。
憂國赤誠甘萬死。　惡嘲諧亦含眞理。

第六師團之韓城堡附近之戰鬪

奉天會戰三月七日



宿志老來猶未弛。夜風遮莫吟窓紙。研朱爐畔點兵書。

呵筆燈前評戰史。妙運用唯存一心。惡嘲諧亦含眞理。

故人休咎禮方忘。憂國赤誠甘萬死。

大正五年十二月二十四日印刷
大正五年十二月二十六日發行

不許複製

戰史評論奥附

著者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町四丁目　宮本武林堂
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

六月刊行
戰史評論 豫告 露軍騎兵大集團の法庫門附近來襲 上

大正五年十二月二十四日印刷
大正五年十二月二十六日發行

（戰史評論與附）

發行所 東京市麹町區平河町四丁目 宮本武林堂
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

次號豫告

吳家崗子附近騎兵第二旅團ノ戰鬪

319
283

終